

体験型鑑賞教育の研究

- 体験型鑑賞授業の実践と使用する教具セットからの考察 -

緒方 信行

はじめに

美術科における鑑賞教育は現在いろいろな手法により実践されている。大きくまとめれば、「知識型」「対話型」「クイズ型」などに分類することが出来る。「知識型」は対象となる作品や作家について追究して行く鑑賞法であり、「対話型」は対象となる作品について子ども達が自由に意見を述べ合っ各々の違いを認め尊重することを主体とする鑑賞法である。「クイズ型」は提示されたものから同じ作家の作品を探したり、作品の一部を隠してそこに何があるのかということなどから主題に迫ったりする鑑賞法である。これらの鑑賞法はそれぞれの長所を持ち、子ども達の鑑賞能力や自主的な活動力を高めていくわけではあるが、知識を重視すれば、子ども達にとって退屈で難しい授業になりかねず、また、子ども達の意見を重視して、対象を読み解くことに主眼を置き子ども達の意見を重視しすぎて、鑑賞の内容が子ども達の対話に終始してしまうとなればこれも疑問である。

表題に掲げた「体験型鑑賞教育」とは、教師が提示した題材の投げかけに始まり、実際に制作者などいろいろな立場になって試行し、自分たちなりの結論を出した上で、最終的には、専門家あるいは大人としての教師の意見を交えて授業を終了するという鑑賞教育の指導法である。現在いろいろと繰り返されている指導法はそれぞれの手法から子ども達の鑑賞能力向上に努めているわけであるが、ここでは、実際に子ども達が作者や評論家などの立場になって活動体験をすることにより題材に掲げられた対象について理解していくという新しい指導法である。

「体験型」という言葉を掲げれば、実際に美術館に向向いて鑑賞し学芸員のもと話しを聞いたり、指導員のもとワークショップに参加したりする活動などが思い浮かぶであろうが、ここでは、自分自身が主体である立場となって仮想体験するという鑑賞法のことである。

まとめれば本研究の特色は、子ども達が、対象に関わる作家や審査員など具体的主体人物となって行為の体験を行い、友達との意見を交えながら、自身の思考を駆使して

最終的判断を下すという過程にあり、さらには、専門家あるいは大人としての教師の意見を聞くことによって、子ども達自身の思考・判断をより高次へと展開させることにある。このような学習行為から、子ども達の自主的な鑑賞への意欲は強くかき立てられ、次への新たなる自発的鑑賞行為へのきっかけをつくることにも繋がると考える。

I 研究の目的と方法

本研究の目的は、「体験型鑑賞教育」が子ども達に能動的で有用な鑑賞の能力を身に付けさせることと、今後の自発的な鑑賞へと発展する効果を生み出していくことを明らかにすることである。

そのために、筆者が開発したオリジナル教材「石庭をつくる！」(図1)や「ルネサンスのライバルI -ブルネスキとギベルティ-」、「あなたも審査員！ -表現にもいろんな道がある-」の授業実践をもとに考察を行い、事前アンケートの回答や授業中における学習の様子、学習シートへの記述などの反応から本研究の目的に迫ることにした。授業は都市部に限らず山間部の中学校でも実践検証を行っている。また、本教材を開発した当時の筆者の授業や教育実習生による同じ内容での授業も参考にしている。

「どこでも誰にでもできる授業」ということも本研究の目的の一つである。そのために、それぞれの教材において使用する教具についても、その具体的な構成と授業における有効性について紹介している。

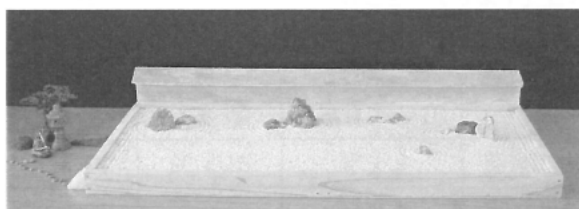


図1 筆者による「ミニ石庭」制作例

II 実践研究

1 体験型鑑賞授業「石庭をつくる！」

「石庭をつくる！」は、筆者が平成 15 年に熊本大学附属中学校で開発し実践発表した授業¹⁾（以下、緒方授業）である。今回新たに、熊本大学教育学部附属中学校の村田崇教諭²⁾と南関町立南関中学校の吉田香寿美教諭³⁾にそれぞれの中学校での授業実践協力（以下それぞれ、村田授業、吉田授業）をお願いした。なお、吉田教諭は大学時代にも筆者担当の教育実習生として同じ授業（以下、吉田実習授業）を行っている。授業学年はすべて 2 年生である。

またここでは、「日本庭園」「枯山水」「石庭」などの言葉が登場するが、無論のこと「日本庭園」は全てを含み「枯山水」は「石庭」を含む名称である。そこで本稿では、子ども達にも分かりやすいようにと便宜上、主に石と砂で構成されたものを「石庭」、草木を有し水を砂で表したものを「枯山水」、そして「石庭」と「枯山水」以外の回遊式庭園など自然を呈したものを「日本庭園」と称することとした。

1) 事前アンケート

アンケートは 2 校とも開発当時と同じ緒方授業のものを実施した。各校の子ども達は修学旅行で奈良、京都方面を訪れる。修学旅行での自発的鑑賞行為も期待して、このアンケートおよび授業は、その事前学習ともなるように修学旅行前に実施した。今回の村田授業と吉田授業に加え、以前実施した緒方授業のアンケートへの回答結果も含め以下記す。

(1) 「日本の美」ということに関心がありますか？

関心が…	① とてもある	② ある	③ ない
村田授業	5.1 %	61.5 %	33.3 %
吉田授業	6.3 %	60.0 %	33.8 %
緒方授業	15.4 %	46.2 %	38.4 %

子ども達にとって、都市部と山間部との違いは見られない。平成 15 年の緒方授業については①が 2 倍ほどの数値

を示しているが、③の数値はほとんど変わらず、3 割ほどの生徒が「日本の美」について関心がないと応えている。

(2) 「日本の美」について、あなたは？

日本の美について	① ある程度説明できる	② 分かっているつもり	③ 分からない
村田授業	0.0 %	53.8 %	46.2 %
吉田授業	3.8 %	27.5 %	68.8 %
緒方授業	0.0 %	27.5 %	72.5 %

「日本の美」について①の説明できる子はほとんどいないという結果である。吉田授業での①と答えた子も、その説明の内容は「他の国にはない日本固有のもの」「日本でしかできない美術の表し方や色がある」「なごやかでやさしい美しさ、平安時代の女性の貴族みたいな人々」とあり、十分に説明できているとは言えない。また、②と答えた子ども達においても、言葉で説明できないのであれば分からないことと同じであり、「日本美」については、ほとんど子ども達が理解できておらず、説明となれば全く出来ないという結果と考えて良いであろう。

(3) 近くに見る事の出来る和風庭園はありますか？

和風庭園が…	① 自分の家にある	② 近くにある	③ ないと 言える
村田授業	2.6 %	20.5 %	74.4 %
吉田授業	7.5 %	6.3 %	81.3 %
緒方授業	5.0 %	12.5 %	—

村田授業では、近くにあると答えた子が多いが小学校の時の見学旅行で行ったのであろう水前寺公園がほとんどで、他に近所の家の庭や熊本城を挙げた者もいた。吉田授業では、山間部に位置する学校であり生徒の自宅自体日本式住宅や庭がやや多いのであろうと推測する。実はこの項目では「④その他」という質問事項もあったが、該当する子はわずかで、その内容も「分からない」であった。和風と洋風の区別が分からない子もいるということである。なお、緒方授業では③、④についての記録がない。

(4) 日本庭園を持つ施設で、知っているものは？

日本庭園	ベスト1	ベスト2	ベスト3
村田授業	水前寺成就園 33人	兼六園 14人	龍安寺 9人
吉田授業	水前寺成就園 11人	龍安寺 5人	兼六園 2人
緒方授業	-----	-----	-----

著名な日本庭園を持つ施設を15挙げて、知っているものを尋ねた（複数選択可）が、村田・吉田授業では「龍安寺」を挙げた子が2割ほどいた。中学2年生は、修学旅行前でも龍安寺の石庭を知っている者は少なからずいる。

(5) 将来、自分の庭はどうしようと思っていますか？

将来の庭	① 洋風に	② 和風に	③ その他
村田授業	56.4%	15.4%	12.8%
吉田授業	51.3%	32.5%	16.2%
緒方授業	-----	-----	-----

将来、自分の家の庭をどうするつもりかという問には、過半数の子が洋風としている。その他と答えた子は「分からない」「決めていない」という回答が多かったが、「マンションに住みたい」という子もいた。将来的に住む家が庭付きとは限らないと思う子も多いようであり、自身の将来設計はまだあまり考えられないようでもある。

(6) 修学旅行での目的や楽しみは何ですか？

旅行目的	ベスト1	ベスト2	ベスト3
村田授業	友達との親睦 28.2%	日本美を 体感する 20.5%	観光 古き日本を 17.9%
吉田授業	友達との親睦 26.3%	観光 17.6%	遊び 16.3%
緒方授業	友達との親睦 42.5%	古き日本を 味わう 25.0%	-----

本授業後、各校ともに奈良、京都方面への修学旅行が実施されるわけであるが、果たして子ども達における修学旅行の目的は何であろうか。アンケートの結果からは、授業前の段階では多くの子ども達にとって結局のところ友情を深めることが修学旅行の第一義のようである。

ただ、村田授業ではベスト3が「観光」と「古き日本を味わう」が同率で合計すれば35%となり、友達との親睦よりも文化的な観光に興味ある子の方が多いと言える。

2) 授業の実際

以上のようなアンケートの結果を踏まえ、それぞれの授業者による実践を行った。「日本の美」について興味を抱くこと、また、「日本の美」について何かしらの言葉で表現ができるようになることを期待しての授業実践である。また、この授業を通して「体験型鑑賞教育」が、子ども達に能動的な鑑賞の能力を身に付けさせ、今後の自発的な鑑賞へと発展する効果を生み出すことが明らかになれば良い。授業の展開は各教師に任せた。共通課題としては「ミニ石庭を実際につくり日本美を体感すること」である。

(1) 村田授業

- | |
|---------------------------------|
| ① 日本庭園を鑑賞する (5分) |
| ② 石庭について考える (7分) |
| ③ ミニ石庭を実際につくり日本美を体感する (20分) |
| ④ 龍安寺と班の石庭を比較しそれぞれの良さを感じ取る (8分) |
| ⑤ 活動を振り返る (10分) |

授業開始早々、「今日は実際に石庭をつくります」との教師の言葉を聞いて、子ども達は驚いた様子を見せていた。村田授業の特色は、ミニ石庭づくりに時間をかけていたところにある。「協力する、考えて、平らな状態で、石は重ねない、全体的美を考えて」などを条件として掲げ、いろんな日本庭園の紹介もあったが、時間的に余裕があったためなのか、子ども達は、砂に模様を入れたり、石の個数を増やしたりして、いろんな要素に目が向き、構成はやや複雑なものになっていた。



図2 村田授業 条件が示された板書

(2) 吉田授業

- ① 前時の和菓子制作を振り返り、「和」について考える (3分)
- ② 外国の庭と伝統的な日本の庭を鑑賞する (7分)
- ③ 石庭の作り方や石の配置の方法を知る (10分)
- ④ ミニ石庭を実際につくり日本美を体感する (15分)
- ⑤ 各班の石庭を見学し、気に入ったものの理由を考える (7分)
- ⑥ 龍安寺の石庭のしくみについて知る (3分)
- ⑦ 学習シートに感想を記入し、発表する (5分)

吉田授業の特色は、一つに①で和菓子制作を振り返るところから始まることである。ちょうど、日本の伝統美について学習している時に、本授業が入ってきたのである。



図3 吉田授業 「ミニ石庭」制作実演

また、もう一つの大きな特色として、③で教師が実際に石庭の作り方を実演する時間が設定されていたことである。子ども達は前に出て来て教卓を囲み、教師の石庭づくりを真剣に見ていた。石庭の砂をまず平らにすることが強調され、実際の石庭づくりでも子ども達は静かに話し合いながら、シンプルなものをつくっていった。

(3) 緒方授業

前述したとおり平成15年の授業である。緒方授業の特色はICTを活用したところにある。日本美に関するものや庭園造りの簡単な仕組みなどをビデオ映像で紹介したり、ビデオで撮った代表班の作品をテレビ画面に映し出して臨場感あるように見せながら、つくったミニ石庭についての検討をさせたりした。学校を挙げた研究発表会の授業でもあり子ども達には緊張感もあったと思われるが、実際のミニ石庭づくりに関しては、静かな中にも意欲的な班活動による制作がなされた。

3) 学習シートに見る感想

学習シートは、授業の展開と同じく各授業者にその内容を委ねた。ここでは今回新たに授業を行った村田授業と吉田授業について、その最終的な感想を抜粋して考察に向かう。村田授業では、学習シートは学習の流れに合わせて作成されており、特徴としては「どんなことに心がけてつくりましたか」と「日本の美についてわかったことを書きましょう」という発問で、美的構成要素に関することと日本の美への理解度を探っている。吉田授業では、学習シートは「わび」「さび」や龍安寺の石庭の具体的な所在や大きさなどについて記録する形であり、辞書的に「わび…「無駄」がなく、簡単で「飾り気」のないこと」「さび…古びて、「枯れた」味わいのあること」と「」内に記入させて、子ども達に日本特有の言葉をしっかり押さえているところがその特徴である。最終的には「今日の感想」という項目で子ども達の授業に対する気持ちを探っている。

(1) 村田授業

「日本の美についてわかったこと」として、ほとんどの

子が何らかの回答を行い無回答は今回の学習者 39 名中 2 名であった。「シンプル、でも工夫があるもの」など簡単にまとめたものもあったが、特筆するものを以下紹介する。

① まずは日本の美について、

- a) 日本の美はけっして派手ではなく数少ない石でより石庭の広さを強調している。また、質素だけどとても工夫されていていろんな角度で楽しめる。
- b) 「日本の美」というのは、ごちゃごちゃしていないということだ。石を多くすれば多くするほど美から離れた気がした。
- c) 質素だけど華やかな美しさ。誰にも表現できない不思議なアート。
- d) シンプルに色合いも単純ですが、自然の様子を表現することが日本の美につながるのかなと思います。私たちの班の作品は、あまりきれいではなかったと思います。これは、シンプルではなく自然な川の様子が上手く表現できていなかったからだと思いました。
- e) 「日本の美」とは、シンプルだ。ということです。今回私達が作った石庭はとても石が多くごちゃごちゃしています。龍安寺の石庭は、やはりさっぱりしてきてきれいだと思った。
- f) ヨーロッパなどの美はシンメトリーで、きちりしている美しさだが、日本は、アンバランスなんだけれども、美しさもある不思議な美。

② どんなことに心がけてつくったかという問に関して、

- a) 黒色と白色の 2 種類の石があったのでこの 2 つをうまく並べて配置しようと思った。また、小さい種類の石を枠として使った。
- b) 全体を見るとときに、バランスがいいようにした。
- c) 石庭の中に川を流している様子を作りたいため、上流と下流という設定をつくり、それと同時に岩の大きさをかえていくことに心がけました。
- d) 砂によって、自然な感じが出るようにした。また、砂が多い空間をつくることと、石の位置が単に並んでしまわないように意識した。

e) 石の大きさを考えて石と石の距離を心がけた。波紋の形になるように工夫した。

これらの意見からは、自分たちが石を多く使ってしまったて日本的な美を表現することができなかった反省が述べられているが、表現においてはそれなりに構成や主題を考えて意欲的に制作していたことが窺える。

(2) 吉田授業

「今日の感想」という大きなくくりの中にも「日本の美や庭園について興味が湧き、修学旅行でも訪ねてみたい」という気持ちが多く見られた。前述したように「わび」「さび」についてしっかり押さえてあることも、具体的に日本について語ることのできる一つの力となることであろう。

感想を抜粋すると、

- a) 今まで日本の庭に興味がなかったけど、少し興味をもつことができました。ぼくは、日本の庭の落ち着いた感じがいいなあと思いました。修学旅行でも訪ねてみたいです。
- b) 一人一人それぞれの石を使ったり、大きさや形をそろえないでキレイにおくということがとてもおもしろかった。龍安寺の庭を作った人もどんな形にしようかと、楽しみながらやっただと思います。
- c) 自分は、遺跡をイメージしてつくってみました。少し日本庭園に興味が出ました。意外と難しかったけど日本の美を感じました。
- d) どの石庭にもそれぞれ、石の置き方や砂の模様で、いろんな思いを表現してあるんだと思いました。また、飾り気のない日本庭園ですが、その中から伝わってくるものは大きいと思いました。班で作った石庭も、工夫して作り上げることができました。良かったです。
- e) 私は龍安寺に行ったことがあって、1 日中ながめていたいなあと思いました。今日、授業で石庭を作ってみて、あまりゴチャゴチャせずに、落ちついた感じが出せたと思いました。将来、本物の石庭をつくってみたいなあと思いました。

f) 私は、和と洋のどちらが好きかと聞かれたら、和と答える人なので、今日の授業で日本の美しい庭を見ることができてよかったです。自分でデザインしてみることもできたので、もっと和について知っていききたいと強く感じました。

吉田授業では、教師の実演指導もあったためか初めから落ちついた雰囲気の中で、シンプルな美を求めてミニ石庭づくりが展開された。ここには、修学旅行で訪れたい意欲を見せる子他、龍安寺の石庭をつくった人の思いにまで迫っている子、将来石庭の庭を実際つくってみたいという子まで登場している。



図4 石の個数が多すぎたミニ石庭



図5 構成を考えたミニ石庭

4) 「石庭授業セット」について

「石庭授業セット」は、ミニチュア石庭づくり教具（以下「ミニ石庭セット」）に指導案や板書用掲示カードなども含めたものとし、これを使えば直ちに授業ができるような貸し出し可能なものを目指して開発した。

(1) 「ミニ石庭セット」の木箱の形状について

「ミニ石庭セット」は龍安寺の石庭をもとに考案したが、石庭の置き石と敷き砂がつくる部分を木箱に入れる形とした。名称は図6のとおりである。ミニ石庭の大きさ、す

なわち木箱の大きさを如何ほどにするのかなどを手始めに考えていった。

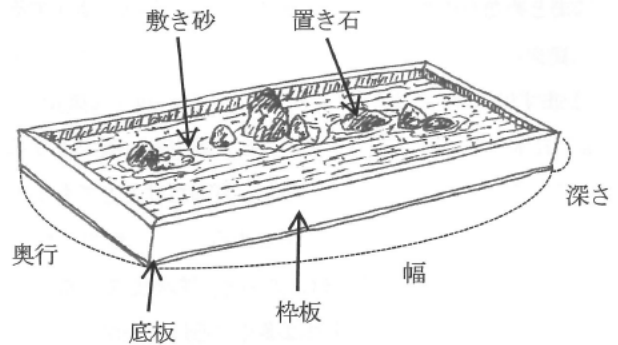


図6 ミニ石庭セットの木箱

① ミニ石庭セット木箱の大きさについて

龍安寺の石庭の広さは、幅 25m で奥行 10m である⁴⁾。その比率を守りながら、ミニ石庭の大きさとなる木箱の形は、幅 35.0cm、奥行 87.5cm とした。これは実際の大きさの 1/35 になる。実はプラモデルなどのスケールモデルも一緒に置けば、より真実味が湧くのではと初めは一般的な 1/24 の大きさを考えたが、子ども達の学習机や展示台の制約も考慮し、一回り小さいスケールモデルの比率の 1/35 とした。もし、市販されている 1/35 の人体プラモデルなどを置いたりすれば臨場感もより高まると考えた。

- ・ 1/24 幅 104.2 × 奥行 41.7cm
- ・ 1/35 幅 87.5 × 奥行 35.0cm

深さは、4cm とした。これは木箱の板材のための市販品規格に合わせたためであるが、感覚的にもちょうど良いものとなった。

② ミニ石庭セット木箱の板材について

木箱の枠板として、市販の杉材の幅 4cm、厚み 1.5cm のものを使用した。底板は 3mm 厚のベニヤ板である。それらを釘打ちして組み立てた。よって、

- ・ 外寸は、幅 87.5 × 奥行 35.0cm × 深さ 4.3cm
- ・ 内寸は、幅 86.0 × 奥行 33.5cm × 深さ 4.0cm

となる。なお、枠材を木箱の中心に横断させるように組み込み、木箱の補強とした。

③ その他

敷き砂と置き石について詳しくは後述するが、ミニ石庭を試作して確認すると、敷き砂をそれほど深くする必要はなく2cm厚のスタイロフォームを敷いて上げ底にすることとした。砂の量も半分ほどとなり軽量化にもつながった。

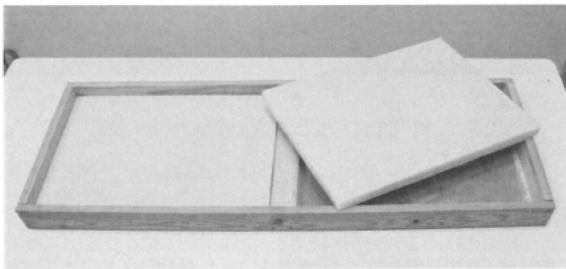


図7 上げ底のミニ石庭セット木箱

(2) 「ミニ石庭セット」の敷き砂について

敷き砂も龍安寺の石庭を参考にイメージした。感覚的なものではあるが、砂はどれくらいの大きさでどんな色のものが適切かを考えた。また、石庭は敷き砂の文様（以降、「砂紋」）もおおきな特徴であり、どれくらいの幅の砂紋にするのかも検討した。

① 砂の色

敷き砂の色は、多くの石庭で単色ではない。微妙な色が混じり合っているように感じられる。ここでは筆者の地元熊本県玉名郡玉東町の木葉山に産する石灰岩を砕いて生じる砂⁶⁾を使用することとした。この砂は白やベージュ、灰色などがほどよい感じで混じっており微妙な白っぽい色合いを出している。真っ白い砂はきれいすぎる感じであり、また、川砂は茶色っぽさが目立って美しさの点から勧められない。

② 砂粒の大きさ

敷き砂は木葉山産のものと決定し、大きさを選定することとした。いろんな種類の大きさがあつたが中でも2mm程度の粒がミニ石庭の大きさに対してちょうど良い景色

をつくった。なお、この砂粒は「にわたりの餌」として市販されているとのこと。言わば一般的に手に入れやすいということと、子ども達に対してもサプライズと成り得ると考え決定した。

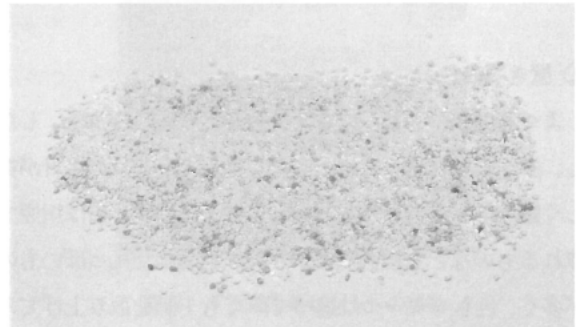


図8 ミニ石庭の敷き砂

③ 砂紋の幅について

砂紋は、図9のような厚紙でこしらえた熊手を使用して模様を付けることにした。8mm、10mm、15mm、20mm目のもの熊手をつくり試行したが、8mm以下では目が細すぎて砂紋が見えづらく、15mm以上になると幅が大きすぎて砂紋が目立ちすぎるようになり、石の景色を損なってしまうように感じられた。

10mm目のものを使用することに決定した。なお、敷き砂全体用のものと、置き石周りに文様をつくるための大小2種の厚紙熊手を準備した。なお、村田授業ではその2種を1つにしたものを考案し使用した。

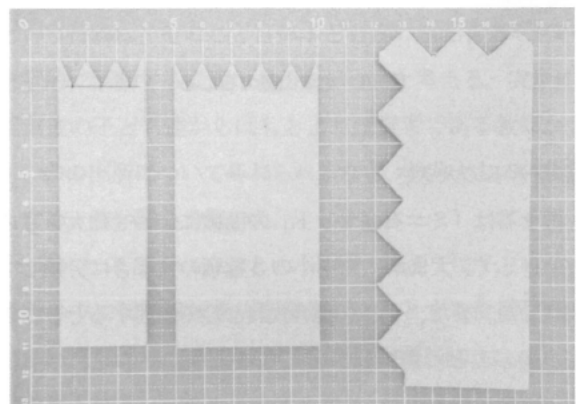


図9 砂紋用厚紙熊手

(3) 「ミニ石庭セット」の置き石について

石庭にとって敷き砂に配される置き石は命とも言うべき大切なものである。石自体が岩や山をイメージさせるなどの景色を持つものが良い。こだわりを持って選定しなければならない。

① 置き石の色と形状

よく石庭風に石を配している庭を見ることがある。しかし、多くの場合黒っぽい火成岩を使ってあり、見た目が美しく魅力的であるとは言い難い感じを受ける。石は川原で取れるものなども検討したが、浸蝕が進んだ丸っぽいものが多く、色も一つ一つは違っていても1個を取り上げてみると多くのものが、単色のように見えて、石庭としてふさわしい景色を期待することはできない。

ここでも、木葉山産の石灰岩が微妙な色合いを持っており、置き石として相応しいと判断した。一つ一つの石の色味や表情などが違っており、ちょうど龍安寺の石庭の置き石のような色合いを放っているものもある。置き石も木葉山の麓に転がっている石ころを採用することとした。



図10 木葉山麓の石ころ

② 置き石の大きさ

置き石は「ミニ石庭セット」の面積に合わせた大きさのものとして、大まかに大中小の3種類の大きさに分類して準備した。また、子ども達が教具として使用するとき自ら選ぶことを選択肢が多くなるようにそれぞれの石は多めに用意した。

大きいものは7cmくらいで、中は4cm、小は2cmくら

いの石ころである。

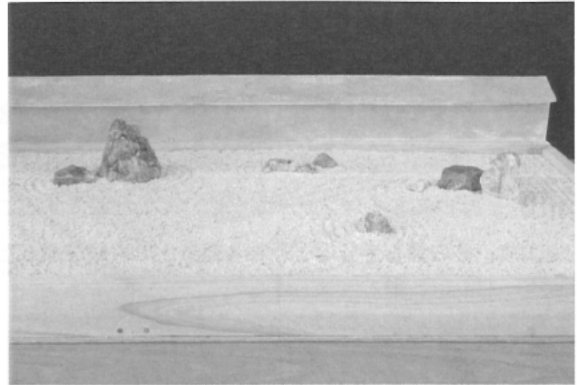


図11 ミニ石庭の置き石

(4) 「石庭授業セット」その他の教具類

誰もが直ちに授業が始められるようにということを念頭に、「ミニ石庭セット」をはじめ、授業計画である指導案や黒板の板書例、板書用掲示カードを用意した。

① 指導案

指導案は、緒方授業のものを基本的な学習展開例としてセットに入れ込んだ。今回の検証授業では、それぞれの指導者が自分の思いや子ども達の実態に合わせて学習を展開することとなった。指導案を含め、提供するセットに各自が工夫を交えて授業を実施できる融通性はあった方が良く考える。

② 板書例および板書用掲示カード



図12 掲示カードを使用した板書例

緒方授業で作成したものを基本とした。これは吉田実習授業でも使用したもので、図12はその時の板書例であり

この図を板書例として「石庭授業セット」に織り込んだ。

(5) 貸し出し教具としての利便性

上記のとおり作成した「石庭授業セット」は、美術教師の誰もがどこでも利用できるよとすることで開発を進めた。貸し出し可能なものとして、教師各々が共有できる授業セットに発展できればよいと考える。「どこでも美術授業セット」として将来的には美術全般的な貸し出し教具構想を築いていければと思う。



図 13 「石庭授業セット」 掲示用教具

また、「どこでも美術授業セット」構想としては、教具が気軽に移動できるものでなくてはならない。本鑑賞授業「石庭をつくる！」では「ミニ石庭セット」などもあり、やや荷物が多く重量もあるが、できるだけコンパクトにまとめた。



図 14 「ミニ石庭セット」 10 班分



図 15 「石庭授業セット」の移動

5) 授業「石庭をつくる！」における考察

授業で最も大切なことは授業前と授業後の子ども達の変容である。今回の授業実践ではそれぞれの学校で子ども達に大きな変容が見られた。

まず、日本庭園に興味のなかった子ども達が強く関心を抱いたことである。アンケートでは日本の美に興味がないという子ども達が多くいたが、授業中の様子や意見、学習シートへの記録からは、子ども達の強い関心が確認できた。また、各実践校とも修学旅行前の実践授業であったが、修学旅行では龍安寺の石庭を訪れたいという生徒も多く見られるようになった。その一つの要因には教具として使用した石と砂への関心があった。石灰岩の取れる山から採取される石と砂はそれ自体でも美しいイメージを子ども達に感じさせた。それらの教具を使つての「石庭をつくる」という行為は、そのこと自体子ども達の関心を強く誘い、意欲的に活動する場面へとつながったと考える。実際に、授業後の子ども達からはもとより授業者である教師からも、砂の出所について尋ねられるなど、教具としての価値も含め、強い関心を引いた。

ついで、石庭をつくるという体験の場面では子ども達の活動の中に美的構成能力を発揮しようとする貴重な場面が多く見られた。石の大小の選定や石の配置に対して、石庭を見る角度を左右上下と変えたり、構成上そこに石は必要かなどを考えたりする姿(図 16)も見られ、美術的能力

の高まりが強く感じられた。吉田授業では、実際に班でミニ石庭をつくる前に、教師が石庭をつくりながら手順を説明したり石の配置の方法を見せたりしたが、子ども達は教師から与えられた知識をもとに、教師がつくる試作品を見つめている時から、自分なりの石庭としての美への創造と工夫が始まっていた。また、一旦砂を平らにならして平行な紋様をきれいにつくるという行為が、子ども達の心を落ち着かせ静かなる作業へと導いた。



図 16 吉田実習授業 構成を工夫する子ども達

さらに、授業中に見られた行動が対話の場面である。現在、国語力やコミュニケーション能力の育成が唱われているが、「体験型鑑賞教育」としての各授業ではその場面が多く見られ、子ども達は自身の意見を述べるとともにそれぞれの想いを確認し合っていた。本教材が、コミュニケーションの場をつくり出し、先述の石庭配置の折の構成工夫でも確認し合う姿が見られたように、コミュニケーション能力を高めるためにも有効であることは明らかである。

以上のことをまとめれば、今回の実践授業「石庭をつくる」からは「体験型鑑賞教育」の有用性として、まずは、以下のような項目にまとめることができる。

① 生き生きしてくる

教具の石や砂への関心、石庭をつくるという行為、日本美への関心、班活動による意見交換など、子ども達の意欲的な活動が見られた。また、教師自体も教材への強い関心を示した。

② 審美眼が育つ

石庭をどう構成するか、石を選定し、その大小や配置へのこだわりのある構成の様子に子ども達の美的活動と美的判断が感じられた。

③ 創造し、工夫し始める

美をどう考えるのか、子ども達は教師から与えられた知識をもとに、教師がつくる試作品を見つめるところから、「自分なら」という創造と工夫が始まっていた。

④ コミュニケーション能力が育つ

「石庭をつくる」という班活動の中で、お互いが意見を出し合いながら思考し、さらに美的構成を高めていこうとするより高次元への意見交換が全ての班で見られた。

⑤ 次への自主的発展へとつながる

学習シートの感想の中には、石庭への興味関心とともに日本庭園に対する自発的鑑賞への意欲や石庭を含む日本庭園づくりなど自主的な将来的活動への発展を意味する意見が多く見られた。

⑥ 真実味がある

ミニチュアではあるが、実際の石と砂を教具として使用した。また、授業の感想には「龍安寺の庭をつくった人も…」とある。実材と実体験が、学習における行為の真実味を生み出している。

2 体験型鑑賞授業「ルネサンスのライバルI -ブルネレスキとギベルティ-



図 17 A : ブルネレスキ作



図 18 B : ギベルティ作

「ルネサンスのライバルI -ブルネレスキとギベルティ-」(以下、「ブルネレスキとギベルティ」)は、1401年のイ

タリア、フィレンツェにおけるサンジョバンニ洗礼堂の門扉を飾るレリーフの制作者を決定するためのコンクールをもとにした教材である。コンクールの最終選考に残ったのがフィリッポ・ブルネレスキ⁶⁾と、ロレンツォ・ギベルティ⁷⁾の2人である。この授業において、子ども達は「審査員」となって、改めて最終選考に残った2人の作品を再審査する。

歴史上の事実として栄冠はギベルティに与えられるが、勝因やその後の経緯については疑惑の残るコンクールである。だがその分、過去の人間達に対していろんな思惑を抱かせる余裕を持っていることになる。

果たして子ども達はどちらのレリーフを選ぶのであろうか。時代性やその他の要因としての資料を掲げながら、授業という形ではあるが、この結末の疑わしいコンクールを子ども達に再現してもらおう。

なお本授業は、平成16年に筆者が熊本大学教育学部附属中学校で開発し実践発表した授業⁸⁾（以下、緒方授業）である。新たに南関町立南関中学校の吉田香寿美教諭に改めて授業実践（以下、吉田授業）をお願いした。また、平成29年にも熊本県立玉名高等学校の「一日若駒大学」⁹⁾にて本題材を実施（以下、緒方高校授業）した。

1) 授業の基本的構想（緒方授業）

まずは基本的構想である緒方授業の概要を紹介する

(1) 題材名

「ルネサンスのライバルI -ブルネレスキとギベルティ-」鑑賞（1時間取り扱い）

(2) 題材について

1401年、イタリアルネサンスが始まろうという正にその時、サンジョバンニ洗礼堂の門扉をめぐるコンクールがフィレンツェ毛織物組合により開催された。最終選考に残ったのがブルネレスキとギベルティの2人である。どちらの作品も優劣つけがたいとされたが、栄冠はギベルティに与えられる。勝因は文献によりまちまちで、技術の高さとブロンズ代の安価さによりギベルティという説があれ

ば、2人ともに最優秀で共同制作となったが、ブルネレスキが降りたという説もある。多くの文献を見てもその他の重大で、決定的な要因は見つけられない¹⁰⁾。

本題材では、時代性やその他の資料を掲げながら、このコンクールを子ども達に再現してもらおうという形で、鑑賞の授業とする。中学校や高校の生徒達に審査員になってもらい改めて評価を下させるが、構成上の観点についても考えさせて、表現の面からも本題材の価値を高めたい。

(3) 指導内容について

まずは直感での評価から始め、次いで、そのころの時代性や「イサクの物語」などを紹介し、知識を与えた上でコンクールの検証を行う。生徒がどちらに評価を下しても構わない。大切なのは、授業中に得たある程度の情報をもとに「考える」という行為そのものである。

緒方授業の場合、次項の実践授業3にて後述する鑑賞授業「あなたも審査員！ -表現にもいろんな道がある-」を、対象学年の前年度の2学年時に扱った経緯がある。本題材では、テーマや美術的な時代性からの判断に加え、画面構成上の観点からも、作品を審査するという「考える力」を深めさせていく。

鑑賞の展開に関しては、吉川登氏の鑑賞学、「見る」「知る」「考える」の3段階思考¹¹⁾に、「述べる」という段階を位置付け、4段階としている。第一印象的な私見から入らせ、情報を与えた上で、新たな思考をさせて、自分の考えをしっかりとした意見としてまとめていくという手法をとる。

(4) 学習の展開

図19が、実際の指導案での学習の展開案であるが、まとめると以下のとおりである。

- | | |
|-----------------|----|
| ① 二つのレリーフの紹介 | 3' |
| ・実際にあったコンクール | |
| ・今日は、コンクールの再検証 | |
| ② 各自および班での初発の評価 | 4' |
| ・どちらが選ばれたらうか | |
| ・実際の審査結果は後ほど | |

- ③ 情報提供 15'
 - ・なぜ、コンクールが行われたのか
 - ・コンクールの概要
 - ・当時の美術表現の特徴と前後の変遷
- ④ 情報を知った上での途中評価 15'
 - ・班での話し合い
- ⑤ 意見発表 3'
- ⑥ 教師の意見、その後の二人について 10'
 - ・当時の審査結果の発表
 - ・作品を立体的に想像して横から見たら
 - ・感想と最終個人判定

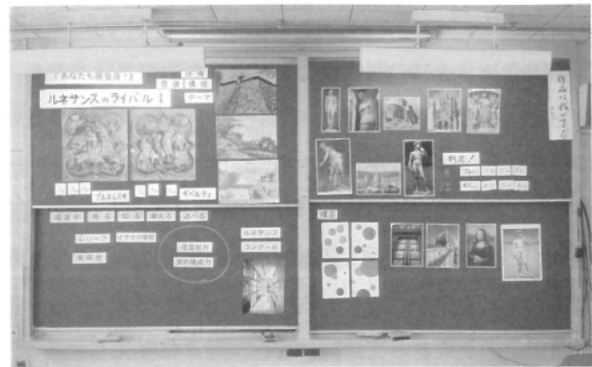


図 20 緒方授業 板書

過程	学習活動	教師の指導と支援	<input type="checkbox"/> 基礎技能 <input type="checkbox"/> 基礎知識
導入 7'	1) 『あなたも審査員！』での評価方法について復習する 2) 本時の学習を知る ▼ 見る	◆ 昨年、風景画をもとに評価の実際を行いましたね。 ・ 意図、構成、テーマの面からの評価。 ◆ 今回は 1401 年イタリヤで実際に行われたコンクールを検証してもらいます。 ・ 場面など、まずはよく見させたい。 ・ 個人評を学習シートに記入させる。	<input type="checkbox"/> 3年審査時に評価した風景画 <input type="checkbox"/> 課題把握 <input checked="" type="checkbox"/> 3年リープの美術大スタアコピー <input checked="" type="checkbox"/> 見る <input type="checkbox"/> 学習シート記入
展開 A 15'	3) どちらの作品が選ばれたのか班で考えてみる 4) 情報を知る ▼ 知る ① コンクールのテーマなどについて知る ② 当時の美術表現の特徴を知る ③ とうておき情報	◆ さあ、どちらの作品が選ばれたと思いますか？ 班で検討して下さい。 ・ 班による直感的評価での見解を聞く。 ◆ では、当時の審査結果を発表します。 ・ ここでは発表せず、期待を持たせる。 ◇ これからの本格的な審査の前に、どんな情報が欲しいですか？ ・ コンクール自体についての紹介。 ・ 当時の美術表現の特徴について。 ◇ とうておき情報です。当時、次のような事実がありました。 ・ 2 作品への評価と勝者敗者の言い分、画面構成の仕方と留意点について。 ◆ さて、情報を知ったところで、最終審査に移りましょう。あなたの班はどちらに栄冠を与えますか？ ・ 情報を得た上での審査を実施させる。 ◇ では、発表して下さい。 ・ 班としての意見を代表に発表させる。 ◇ さあ、最終判定です。班の結果と違っても構いません。多数決で決定します。 ・ 個人的見解でも多数決をとる。	<input type="checkbox"/> 作品評価 <input checked="" type="checkbox"/> 知る <input type="checkbox"/> コンクール <input type="checkbox"/> レリーフ <input type="checkbox"/> プルネレスキ <input type="checkbox"/> ギベルティ <input type="checkbox"/> イサクの犠牲 <input type="checkbox"/> ルネサンス <input type="checkbox"/> 美術史 <input type="checkbox"/> 鑑賞学 <input type="checkbox"/> 2作品レプリカ <input type="checkbox"/> VIR おおまかな美術史の流れ <input type="checkbox"/> VIR 当時の頃の表現の流れ <input type="checkbox"/> 解説シート <input type="checkbox"/> 構成カード <input checked="" type="checkbox"/> 考える <input type="checkbox"/> 学習シート記入 <input type="checkbox"/> 鑑賞能力 <input type="checkbox"/> 想像力 <input checked="" type="checkbox"/> 述べる
展開 B 18'	5) 班で審査し、発表する ▼ 考える ① 班内審査 ② 意見発表会 ▼ 述べる ③ 最終個人判定	◆ では、当時の審査結果を発表します。 ・ 当時の審査結果と本日の結果の対比 ・ 教師の見解・構成から A or B を推す。 ◆ 最後に彼らのその後を紹介して今日のまとめとします。 ・ 2 人と時代のその後を紹介する。(2') ・ 授業の感想を書かせる。(3')、発表(2')	<input type="checkbox"/> 美的構成力 <input type="checkbox"/> 透視図法の立体配置観望 <input type="checkbox"/> VIR それからの2人と時代 <input type="checkbox"/> 学習シート記入
まとめ 10'	6) 当時の審査結果を聞く 7) まとめ		

図 19

(5) 付属する資料等について

① 板書計画

板書は、できるだけ丁寧に美的に配置するように心がけている。授業の終わりの挨拶の時に教師の背後に、本時で学習した1時間分の学習内容が、ちょうど参考書の見開き解説ページのようにまとめてあるように意識している。なお、図 20 にあるような掲示資料を提示した。

② 学習シート

学習シートは、まずは初発の感想を書かせ、グループ全体での欄も取り入れた。班による審査後に再度どちらに決定したかを記入させる欄を用意して、最終的授業の感想を記入する枠を準備した。

授業日 平成16年7月18日

鑑賞『ルネサンスのライバル I』ワークシート

3年 組 号 氏名 _____

1 よく読ましよう！

気づき：共通 ・ 工情がよい。 ・ 手がよい。 ・ 顔がよい。 ・ 人を思いやう。 ・ 城が町人がおどろかすように見えている。	Aについて ・ 神様の人々が笑顔をみせている。 Bについて ・ 神様の人々が怒りをみせている。
--	--

★ 第1回判定 私は B である。 班としては B である。

2 情報を知った上で、もう一度！

★ 第2回判定 …………… 班としては A である。

A) プルネレスキの作品のPoint テリクテアがアラムの神様が 象に似ておどろかす様子 がよく伝わった。 また、Aは立がわいて、少量 のプロットを構えていると伝 わる。	B) ギベルティの作品のPoint テリクテアがアラムの神様が 象に似ておどろかす様子 がよく伝わった。 全体的に写りすぎていて、 少量の象に似ていて、 象の顔が写りすぎて、立 ちがわい。
---	---

3 最終判定 //

★ 最終的には… B 理由は… 顔が写りすぎて、細いアラムとアラムの象の顔が似ておどろかす様子から、Bの方がよく伝わったから、Bの方がよい。

※ 授業の感想を書いて下さい。

今日は、ルネサンスという授業から、2つの作品を見比べることができました。最初はどちらの作品も、ラテン語で書かれたので、読みが難しかったです。でも、先生の解説のおかげで、少しずつ理解が深まりました。特に、AとBの両方の作品の背景や、象の顔の写り具合が、とても面白かったです。最終的にBを選んだのは、顔の写り具合が、Aよりもよく伝わったからです。

図 21

図 21 の学習シートの生徒は、最初から最後までBギベルティのレリーフを推しているが、班はAブルネレスキに変更している。

③ 解説シート

吉川氏が唱える鑑賞教育の「見る、知る、考える」に倣い、「知る」資料として「解説シート」を準備した。以下の項目と内容を記した資料である。なお、ここでは簡潔にまとめ紹介する。

- a) コンクールの開催理由；10年おきにフィレンツェで起きるペストの流行を治めることを祈念して実施。
- b) コンクールのルール；旧約聖書創世記 22 章「イサクの犠牲」を主題とし、候補者にはブロンズ板4枚が与えられた。
- c) 「イサクの犠牲」について；100歳のアブラハムはやつと子イサクに恵まれるが、神からその子を生け贄に捧げよとお告げがある。アブラハムが正に刃を向けようとした瞬間、忠誠さを信じた神は御使いに止めさせる。
- d) 審査の結果；審査は審査員そして市民の間でも真っ二つに意見が分かれた。結果については今も曖昧なところがある。
- e) 作者紹介；最終選考の2人は共に20代前半であり、彫金師などとしての技量が卓越であった。

④ VTR 資料

生徒たちに、ギリシア時代からルネサンスまでの彫刻や絵画、建築等の美術史的表現の展開を紹介するビデオと、ブルネレスキとギベルティの「二人のその後」と題したビデオの2本（共に時間は2分間）を用意した。「二人のその後」の内容はまとめると以下の通りである。

- a) コンクールのあと2人はそれぞれの道を歩き、勝者とされるギベルティは、洗礼堂のレリーフづくりに励み、コンクールの第2門に次いで第3門も引き受け、その扉は『黄金の門』として後の世にも語られることになる。
- b) ブルネレスキは、彫刻をいっさい行わず建築家として名を馳せることになり、フィレンツェの大聖堂のドームをつくる。

c) 大聖堂のすぐとなり、ギベルティが手掛けた洗礼堂がある。隣で行われる大工事…ギベルティはどんな気持ちで眺めたであろうか。勝者はいったいどちらだったのだろうか。

d) ギベルティがコンクールで表した透視図法的表現は、皮肉にもブルネレスキが理論を完成させて、ブルネレスキは透視図法の発明者と言われることになる。

e) 時代は本格的なルネサンスへ…後の世に、ダビデをつくった巨匠ミケランジェロは、ギベルティのレリーフの門を見上げ、「これこそ、まさに『天国の門』という名にふさわしい門である。」と褒め称える。

f) 熱きコンクールを繰り広げた、ブルネレスキとギベルティ。2人は、まさに芸術家としてそれぞれ満足した一生を過ごしたであろう。

g) 600年も経って、よその国の子ども達にもう一度コンクールをしてもらった2人。天国でニッコリ私たちを見ている…のかもしれない。

(6) 授業後の感想

以上のような授業を実施した際の、平成16年度3年3組での感想は以下のとおりであった。

① ずっとブルネレスキを推した生徒

a) 2つの絵を見比べることから、時代背景などを感じる事ができました。特徴をつかんだりするのがかなり難しかったです。先生の考えを聞いたあとで、構図も評価の中では重要だという事が分かりました。とても楽しい授業でした。

b) 二人の芸術家が争った事実があると知り、とても驚きました。どちらの作品もすぐれていて、当時の審査員は大変だっただろうなあと思いました。でもそういう話し合いに、今日自分も体験できて楽しかったです。

c) 微妙な違いから判定するのは、むずかしかったけど、おもしろかったです。クラスの中でも意見が分かれたので、審査員の中で分かれるのも当然だと思いました。どちらの作品もリアルですばらしい作品だと思いました。それぞれに良いところがあって、よかったです。

② ずっとギベルティを推した生徒

- a) 「開運！ なんでも鑑定団」の「目利き選手権」み
 いただいた。ギベルティの作品は、顔が美しく、今まさに
 天使が止めようとしている緊迫した感じが出ている。奥
 行きがしっかりしていた。今回のような授業はまたして
 ほしい。
- b) どちらも上手いし、物語の描写もよかったと思う。だ
 から、どちらになっても誰も不満はなかったのではない
 かなと思います。人の作品を評価するのはすごくむずか
 しいのだなあと思いました。
- c) 第一印象はAだったけれど、いろんな情報を得て、結
 果Bがよいと思えるようになった。「見る→知る→考え
 る」の流れはとても大切なのだとわかった。二人の作者
 はどちらもすばらしい力をもっていたと思うので、コン
 クールで白黒をつけられ、今後の人生まで揺らがされて
 しまうなんて、すごくびっくりした。

③ プルネレスキからギベルティに変更した生徒

- a) 最初2つの絵を見たとき、どちらも同じだと思ってい
 ましたが、時間をかけて見ると微妙な技術も違うよう
 です。最後の判定では、Bとしましたが、もし当時の審査
 結果がAだったらAにしたかもしれません。審査員の苦
 労が分かりました。
- b) とてもおもしろかった。他の人の意見を聞いてみると、
 自分ではBだと思っていたものがAもいいなあと思う
 ようになった。コンクールでは当時の審査の好みや、習
 慣なども関わってくるから一つにまとめるのは大変だ
 ったと思った。
- c) 二つのあまり差のないような絵を比べてみて、どちら
 がどういう風に、どこが優れていたのか、テーマ、技術
 等から見ていろいろ考えなければならなかった。絵を見
 るときの観点など、考えさせられた。描くときにも考え
 ようと思う。

2) 吉田授業

(1) 吉田授業の展開

- ① 二つのレリーフの紹介 5'

・ずっと前に実際にあったコンクール

・今日は、君たちで改めての再審査

- ② 各自での初発の評価 5'

・審査委員になりきって
 ・気づきを出し合いながら

- ③ 情報提供 15'

・2人の作者名の紹介
 ・なぜ、コンクールが行われたのか
 ・コンクールの概要
 ・作品を奥行きでとらえたら
 ・観点をもとに評価
 a ; イサクの犠牲のテーマをより表現できていたのはど
 ちらだと感じますか？（動き、人物の表現に着目する
 と…）
 b ; 構図が格好いいと感じるのはどちらですか？ また、
 どのところがよいと感じますか？

- ④ 情報を知った上での最終評価 15'

・班での話し合い
 ・自分の意見が変わったら朱書きで変更

- ⑤ 意見発表 5'

- ⑥ 教師の意見、その後の二人について 5'

(2) 付属する資料等について

板書は図 22 のとおりであり、誰がどちらの作品を推し
 ているかは、一人一人の名前カードを置くことにより一目
 瞭然となった。

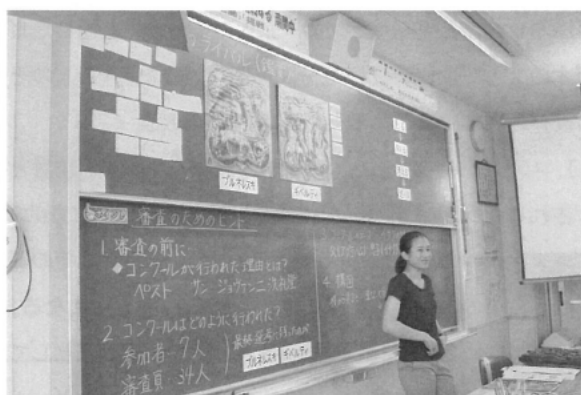



図 22 吉田授業 板書

「ルネサンスのライバル」審査申込紙

3年1組 名前


A



作者「アンデルスキ」

一番感銘を受けた
アイザックの表情、いさよんがさかむらさ

B






作者「ギベルティ」

第一印象であなたが選んだのは…
B

一番感銘を受けた
アイザックの表情、いさよんがさかむらさ

1. 審査の前に…

◆コンクールが行われた理由とは？
当時、イタリアでは10年おきに「パドヴァ」という病気が大流行した。皮膚が黒く厚くなって死ぬので、聖死病とも呼ばれていた。1400年の夏は1万2千人が犠牲になった。翌年の1401年、疫病神の怒りを静めるため、(サン・ジョヴァンニ 洗礼堂)に新しき彫像を1対作することを決めた。


サン・マリア・デル・フィオーレ大聖堂 サン・ジョヴァンニ洗礼堂

2. コンクールはどのように行われた？
コンクールの経緯はギリシャ時代にさかのぼり、歴史と伝説があった。視型によってすぐれたところを売り込むのが一般的であり、当時のコンクールは参加者(4)人、審査員(34)人で行われた。そこで、最終審査に残ったのが、作者A、作者Bだった。

3. コンクールのテーマとは？
「イザックの犠牲」…神の試練としてはあまりにもむづかしい物語。
父アブラハムが(100)歳のときにやっと生まれた息子(イザック)。神はアブラハムの信仰を試すために、「イザックをいけにえとして火にかけよ」と命じます。信じたアブラハムはイザックとともにいけにえの山を登ります。神に命じられた場所に着くと、アブラハムは首を絞めてイザックを縛り上げ、祭壇の上に築いていけにえを献げたのです。しかし、まさにそのとき、天使が現れてアブラハムを押しとどめ、神の言葉を伝えました。「その子に手を下すな。あなたに、神をおそれるものだとということが分かった」アブラハムが目を上げると、一頭の牡羊が木道にいたのが見えました。彼は、これを代わりにいけにえとしたのです。まさに二人が築いたのはこのシーン！

4. 構図に注目しよう

同一視線と比べ




「A」の作品 「B」の作品

どちらの作品の構図を表現しているだろうか？
奥行きがあるように感じは

5. いよいよ本格的な審査

●次の視点に注目して審査をしてみよう

視点	A or B	理由
①イザックの犠牲のテーマをより表現できていたのはどちらだと感じますか？ 動き、人物の表情に着目すると…	A	アイザックの表情、いさよんがさかむらさか出ていて、テーマをより表現できています。
②構図がカッコイイと感じるのはどちらですか？どんなところがよいと感じますか？	B	手前表情がAより大きく書かれていて、動きがよい。

さて、最終審査を経て、あなたが選んだのは… A

理由…
神に命じられたアブラハムの表情や動きがAの方が表現されていた。イザックの犠牲の表情の良さからです。 手前

6. 今日の感想

600年前につくられたこの作品が、今もこうして授業で鑑賞できています。この作品は、とても素晴らしいものだなと感じました。これからは、さまざまな作品にふれてみたいと思います。

最終コンクールを勝ち取ったブルネレスキとギベルティ…Aの作品は、今もこの国の子ども達にもっとコンクールをしてほしい二人、天啓されたらいいなと思います。




図 23 学習シート 表

図 24 学習シート 裏

吉田授業では、学習シートは独自に考案した。学習シートは表裏の2ページとして、判定や記述の欄に加え、解説も含ませ、ブルネレスキとギベルティのレリーフの奥行き構成モデルもイラストで紹介した。

(3) 授業後の感想

① ずっとブルネレスキを推した生徒

- a) 私は最初も最終審査もAにしました。絶対にAだと思いました。でも、Bの人の理由を聞いてみると「なるほど」と思うことがたくさんありました。選ばれたのはBだったけど、他の人には、自分が思いつかない考えがたくさんあってすごいと感じました。
- b) 私は今回初めてのコンクールの審査をやってみて、2つの絵はとても構成が似ていて何を伝えたいかを読み取るのがとても難しかったです。でも、2つの絵の意味を読み取っていくうちに、実際は全然違って驚

きました。また、いつコンクールの審査を出来るかは分からないけれど、また審査する機会があったなら、もっと深く読み込んで選択していきたいなと思いました。

② ずっとギベルティを推した生徒

- a) 洗礼堂の扉として使われると聞いて、家にもこんなきれいな飾りがあるならいいなと思いました。…というか逆につくり方を知りたいと思いました。どうしたらこんなに繊細にうまくできるのか知りたいですね。今日はとても楽しかったです。
- b) 当時、34人の審査員がどのような観点で審査をしたのかが気になります。ギベルティの作品は、何が極め付けだったのでしょうか。レリーフの鑑賞は初めてでした。絵画も彫刻も今回のレリーフも、作者の込めた念は多少違えど想像し、思考を繰り返すことで、より一層見え方が変わるものです。

③ プルネレスキからギベルティに変更した生徒

- a) 僕は今回、同じテーマでも人によって全く違う作品になることが分かった。同じテーマでも構図が違ったりしておもしろかった。1401年のコンクールを今もたくさんの人が知っていてすごいと思った。自分は最初Aを選んでいたけど、最後にはBになったので、作品の意味を知ること、人の考えも変わるんだと思いました。
- b) コンクールで作品を選ぶのは難しいと思いました。テーマにそった絵や自分が格好いいと感じる方を選ぶといいけど、別々だった場合はどちらを選んだらいいのかなどと思いました。
- c) 最初パッと見たときは違いがあまり分からなかったけど、どちらが良いかなどじっくり見ていくうちに、それぞれの作品の良さが分かっておもしろかったです。そして、友達が発表する説明が納得することばかりでなるほどと思いました。

3) 緒方高校授業

(1) 緒方高校授業の展開

玉名高校における「一日若駒大学」での授業は、「緒方授業」の展開をもとに行った。

(2) 付属する資料等について

板書は、一枚黒板なのでより簡潔なものとした。また、解説シート、VTR資料については「緒方授業」のものを利用した。なお、学習シートは吉田授業の学習シートをもとに改良したシート(図25)を使用した。筆者指導ゼミの学生が教育実習で考案したもの¹⁸⁾である。

(3) 授業後の感想

講義に参加した高校生は、1年生17名、2年生7名の計24名。意見の内容は中学生と似たようなものだったので、ここでは、評価の理由を紹介する。

① ずっとプルネレスキを推した生徒

「迫力とリアル感がある」「立体的で迫力がある」「構図に迫力を感じた」「行動や動作が大きく、テーマにそってい

て分かりやすい」「刺された後、止めに入っている人の動きがあり、良いと思った」「Bの方が細かいが、扉のレリーフとしてはこちらがふさわしいと思った」「迫力があり分かりやすい」「Aの方がアブラハムやイサクや神が中心だと思える」

② ずっとギベルティを推した生徒

「人の表情がより細かく、そこから悲愴や覚悟がうかがえる」「構図(奥行きなど)が時代を先取りしているから」「構図がきれいだから」「奥行きがあって1つ1つがきれいに描かれている」

③ プルネレスキからギベルティに変更した生徒



「奥に奥に奥行きがあって構図が格好いいと思った」「表情がよく、構図や人物などの配置がよかった」「アブラハムの覚悟を決めた感じと、召使いの構図が好きだから」

投票日 10月 3日

鑑賞「ルネサンスのライバル」

(幸 / 組 / 身 / 氏 / 名)

1 比較しましょう！

A) プルネレスキ 作	B) ギベルティ 作
	
特徴 <u>迫力</u> まよひ感 感想 <u>人々の</u> <u>様子がわかる</u>	特徴 <u>静かな</u> <u>表情がわかる</u> 感想 <u>人の表情が</u> <u>よくわかる</u>
☆第一回判定 私は <u>A</u> である。 誰としては <u>A</u> である。	

2 情報を知ったうえでもう一度！

A) <u>改めて感じること</u> <u>アブラハムが、</u> <u>両手で抱きかかっている感じがわかる</u> 評感する点 <u>主人公がわかる</u>	B) <u>改めて感じること</u> <u>アブラハムが、</u> <u>両手で抱きかかっている感じがわかる</u> 評感する点 <u>よくわかる</u>
☆第二回判定 私は <u>A</u> である。 誰としては <u>A</u> である。	

3 最終判定！！ お！ 変わった！！

☆最終の私は... B 理由は... 右側先生のくびりの部分
目がいいと思ったため

※投票の感想を書いてください
右側先生は資料をいっしょに見てくれてよかったので、分かりやすかった
です。いつもより丁寧に書いて、頭を悩ませたので、資料がちゃんと見えて

good!

図 25

4) 「ブルギベ授業セット」について

授業名を略して「ブルギメ授業セット」と称したブルネレスキとギベルティによる2つのレリーフを大体実物と同じ大きさのレプリカを作成したものを主とした教材セットを作成している。

二つのレリーフがなぜ制作されたのか、ここでは、その経緯について紹介するとともに、この二つのレリーフの、体験型鑑賞教育の教材としての価値について提案する。

(1) 二つのレリーフの成立

ブルネレスキとギベルティの二人が勝敗を決することになったコンクールは、イタリアルネサンスが始まろうとする正にその時の1401年に、サンジョバンニ洗礼堂の扉のレリーフの作者選定をめぐって、フィレンツェ毛織物組合により開催された。およそ10年毎に起きるペストの流行を治め癒やすためにと実施されたのである。

そのコンクールの課題として出されたテーマが「イサクの犠牲」である。この課題は旧約聖書「創世記」22章に基づいており、要約すると以下のとおりである。

神は忠誠心を試すために、愛する独り子イサクを生け贄に出すよう100歳になるアブラハムに命じる。彼はその命に従いイサクを召使いととも山に連れて行き祭壇を築き、息子イサクを縛って壇上に載せ、刃物でその命を奪おうとする。その時、アブラハムの信心深さを確認した神の御使いが現れ、アブラハムのその瞬間を止めに入り、イサクの命は絶たれずにすむ。

終選考に残ったのがブルネレスキとギベルティの二人である。どちらの作品も課題「イサクの犠牲」のテーマに迫り、優劣つけがたいとされた。結果、栄冠はギベルティに与えられるが、前述したように、勝因は文献によりまちまちで、技術の高さとブロンズ代の安価さによりギベルティという説があれば、二人ともに最優秀で共同制作ということになったが、ブルネレスキが断ったという説もある。後者の説は、ルネサンスの著名な芸術家を紹介するジョル

ジョ・バザーリ³³によってその著書『画家・彫刻家・建築家列伝』に、明確に記されている³⁴。それはブルネレスキと、当時これも有名な彫刻家ドナテロ³⁵の二人によって語られたこととして紹介されている。これに対して、ギベルティは、はっきりと自分一人が選ばれたと、自叙伝『コメンタリイ』にて述べている³⁶ようだが、バザーリの著書はイタリアルネサンス当時の芸術家を著す資料として名高いものであり、それによる紹介は後の世にも強い影響力を持ち、佐々木英也が監修した『NHK フィレンツェ・ルネサンス2 美と人間の革新』でもバザーリの主張を強く押している³⁷。他の文献を見ても、大方バザーリの主張を踏襲しているが、果たしてどちらが正しいのか、その他の重大で決定的な要因は見つけれられない。

(2) 二つのレリーフの教材としての有用性

ここまで、二つのレリーフの成立について述べ、作者であるブルネレスキとギベルティの立ち位置についても紹介してきた。バザーリの著書が如何にそれ以降の時代に影響しているか、第三者が語る人物記録としてしっかり残っているところにその重みがある。しかし、バザーリはこのコンクールの110年後に生まれた人物である。そして、著書『画家・彫刻家・建築家列伝』は1555年に出版されたものであり、彼らの死後100年、コンクールからは150年ほど経って記されたことになる。フィレンツェ大聖堂の円蓋を建築し、透視図法の生みの親³⁸と呼ばれるようになったブルネレスキが、当時の人々から崇拜され、その語る言葉が優位となり、それ以降の時代の中でさらに美化され真実化されていった可能性はないとは言えない。

さて、史実がどうであったのかを追究することは他研究者に任せることとして、美的構成面から改めて二人の作品について対峙し、美的要素から再検討して自分なりの評価を出すことは、研究者や芸術作家にとってもたいへん意味あることと考える。果たして最優秀はギベルティなのか、ブルネレスキなのか、再審査という形で2つの作品を、文献等のしがらみに関係なく自由に評価することが可能になってくると考える。このことは芸術家ばかりでなく一般鑑賞者などにとっても興味あることであり、中学生など子

ども達にとっても自由に評価のできる面白味のある鑑賞教材になると考える。

実際、当時のコンクールにおける実質的な審査員は、市民達であったと言われる。その頃の風潮として、芸術に関する豊かな素養と的確公平な鑑識眼を持つことが市民の重要な素質とされ、芸術家の力量は市民の判断に委ねられていた¹⁹のである。このことから、一般鑑賞者が芸術作品を評価したり、中学生など子ども達が美術に関心を持ち、作品をよく見つめながら評価をしようとする行為は、自身自身の素養を高めるためにも有意義なことと考える。また、審査員となって改めてコンクールの再審査を行うというこの教材のように、「体験型鑑賞教育」というものが、美術教育において重要な役割を果たす一つの方法に成り得ると考える。

(3) 二つのレリーフの絵画的構成について

レリーフは日本語では「浮き彫り」と称され、絵画的な要素が強い半立体の彫刻表現の作品である。ここでは、ブルネレスキとギベルティの作品についてその形状を紹介する。ともに大きさ²⁰は、縦45cm、横40cm、ブロンズ仕上げで、作品はイタリアのフィレンツェ、パルジェロ美術館に二つ並べて展示されている。

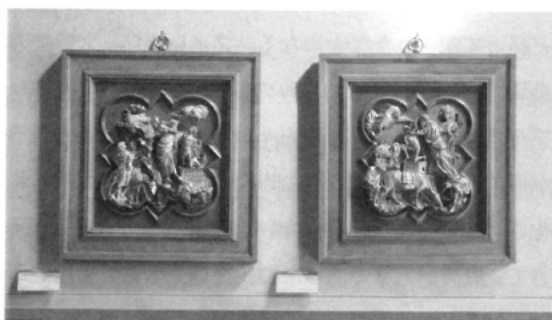


図26 パルジェロ美術館での展示

コンクール当時のフィレンツェ市民は二つの作品をどのように見たのだろう。ここでは、二人のレリーフをまずは絵画的な構成としてとらえてみよう。

ブルネレスキの作品は全体的に、上下と左右がそれぞれに対称的な配置で表されていると言える。中央の横軸は型

枠としての四つ葉模様の菱形の左右の頂点とイサクが乗る台の上辺により上下に分けられ、さらに上半分は三分の二のところ、風になびくアブラハムのマントと天使の左腕などが作り出す線で画面が横切られている。下半分も同じでロバの背が作り出す線とロバの腹部が作る線の2本で分断されているように見える。また、左右は四つ葉模様の型枠の菱形の上下の頂点を結ぶ線により、真半分で、構成物が右と左で線対称的に配置されている。

しかし、主題であるイサクとアブラハムが中央に配されて、正にイサクを刺そうとする短剣、正にその手を止めようとする天使の手など迫力ある雰囲気を作り出しており、この点に関して子ども達は特に好感を抱き、ブルネレスキの作品の方を推す理由となっている。



図27 ブルネレスキの構成

それに対して、ギベルティの作品は、アブラハムを画面の中央寄りに配しながらも、イサクとともに画面の右半分には配置されている。ギベルティの画面構成はどちらかと言えば左上から右下方向へと向かう斜めの山の稜線で分けられている。一点透視図法的な画面配置ではあるが、ブルネレスキの作品ほどのダイナミズムは感じられない。しかし、絵画的な構成とはいえ、十分な奥行き感を出しており、ロバと召使いの居る場面から、山の稜線がつくる斜線を軸に、回転しながら奥の主題場面の方へと展開させるような動きを感じさせる。そしてさらに、天使や羊の居るずっと

奥の方へと意識を移動させるのである。また、細部にわたる丁寧な制作は、繊細な印象を感じさせ、その全体的な仕上げの良さに、観るものの心の内に好感的態度を抱かせるようである。



図 28 ギベルティの構成

(4) 二つのレリーフの立体的構成について

次に、ブルネレスキとギベルティのレリーフを立体的構成の面から見てみよう。もちろんレリーフは半立体で肉厚があるものとは言え、実際上の奥行きには限りがあり、平面としての絵画的要素で補われているので、奥行きは絵画的な構成から想像しながら判断するしかない。

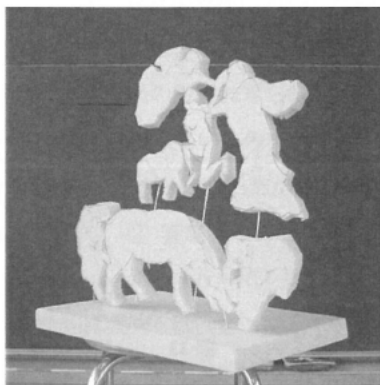


図 29 ブルネレスキの奥行き模型

ブルネレスキのレリーフは、前項(3)の絵画的構成で述べたとおり、大きく2場面から成り立っている。そして、そ

の2場面のそれぞれは横並びで平面的配置となっている。模型で表せば図 29 の写真のようであり、実に平面的で単調な立体構成であると表現せざるを得ない。

それに対して、ギベルティのレリーフは、手前の召使いやロバ達から、崖、アブラハム、イサク、天使、羊というようにだんだんと奥行きを感じさせる構成であり、その奥行きを模型にすると次の写真のようになかなりの距離感を想像することができる。

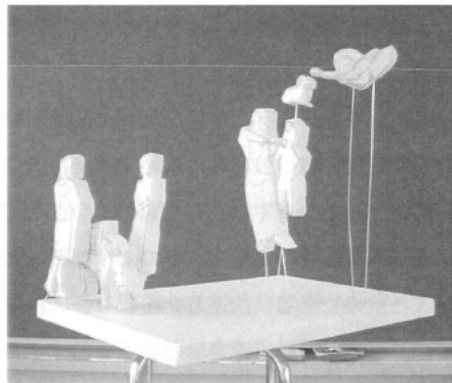


図 30 ギベルティの奥行き模型

さらに、フィレンツェのバルジェロ美術館に展示してある実物を見れば、ギベルティのレリーフの方がかなり厚い肉づけで表現されている。左方向から見た図 31 や、右方向から見た図 32 の写真からは判断しにくいですが、展示されている実物を実際に見ると、向かって左のギベルティのレリーフの方が、肉付きの厚さを感じさせて、鑑賞者に対してより奥行き感のある印象を与える。



図 31

図 32

(5) 当時の流行、スタイル

当時の美術表現における様式はどのような変化を見せていたのだろうか。1401年頃はちょうど、ゴシックからルネサンスへと移行する節目に位置する。絵画は写実性が明確になってきており、奥行きをどのように表現するかという課題を解決しようとする動きがある。ルネサンス時代になって一点透視図法が生み出されるが、画家たちは透視図法による表現に執着を見せ始め。彫刻についても写実性を増しながら、ドナテッロなどの時代へと移っていく。時代は正に、写実性や透視図法的遠近感を求める表現の時代へと向かっているのである。

その渦中にありながら、ブルネレスキのレリーフは、一つ一つの部品が区分けされるように平面的に配置され、おそらく、アブラハムの背中から見たら、イサクも天使もそして羊さえも見えないであろう。そのような平面的処理を施してしまったのである。前述したとおり、ブルネレスキの構成では、召使いとロバ達がいる場面と、イサクやアブラハム、天使がいる場面の二つの平面的横並び構成で組み立てられており実に簡単な構成と言わざるを得ない。たとえば、テーマがドラマチックに表現されていると言えども、最終的には単調で変化に乏しい、説明的で飽きのくるような印象を鑑賞者に与えてしまうことになる。

それに対して、ギベルティのレリーフは、奥行き配置が十分に考慮されており、ロバや召使い、崖、アブラハム、イサク、天使、羊の順で奥へ奥へと見せていく構成がなされている。正に本格的イタリアルネサンスに続く、透視図法的画面構成が取り入れられている作品であり、時代が求める遠近法を十分にならせた作品となっている。

1401年、時代は奥行きや写実観を大切にしようとしてきたゴシック時代から、さらに確実な透視図法や真実味のある写実性を取り入れていこうとする本格的ルネサンスの時代へと移行しようとしていたのである。この時点で旧態依然としたブルネレスキの作品よりも遠近感がありより写実的で繊細な表現を見せるギベルティのレリーフの方が、コンクールで選ばれたのは、時代の流れからすれば当然のことと考えられる。

(6) 授業における子ども達の変化と感想

授業の初発で、子ども達の多くが迫力あるブルネレスキの作品の方を選んだ。そして、授業を受けた後の結果は以下の通りである。

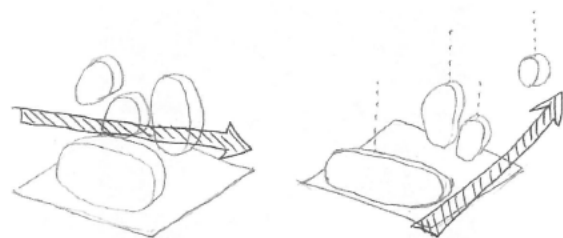
2016年南関中学校 3年生A組 25名

南関 A組	初発	最終
ブルネレスキ	21	14
ギベルティ	4	11

2004年附属中学校 3年生B組 41名

附中 B組	初発	最終
ブルネレスキ	34	21
ギベルティ	7	20

最終的には拮抗してくる傾向があるが、これは教師が当時の表現スタイルの展開の説明や、二つのレリーフを立体的に想像して、「もし、作品がつくる場面を横から見たとしたら」という投げかけに、子ども達の心が揺らぎ反応したものだと考える。具体的に、「緒方授業」では、先ほどの図29・30の写真のような模型で示し、「吉田授業」では次のようなイラストを用いて具体的に示した。この過程を通して、子ども達はさらに詳しく作品に対峙し、自分なりの追究を深めようとする。



「一直線上に並ぶ」

「奥行きを感じる」

図 30

5) 授業「ブルネレスキとギベルティ」における考察

授業の初発では大きくブルネレスキを推していた生徒達が、ある程度の知識を獲得した後ではおよそ半々という

結果になっている。これは1401年当時と似たような結果なのかもしれない。先述したように当時、市民もコンクールに参加し、芸術に関する豊かな素養と的確公平な鑑識眼を持つことが市民の重要な素質とされていたのである。知識を持たない初発の生徒達は圧倒的にブルネレスキの迫力を好んだ。しかし、ある程度の知識を有するとギベルティの良さもだんだんと理解し始めるのである。

授業前と授業後で生徒達は大きく変容した。本授業の価値が明らかになったことを示している。ただし、それでもブルネレスキの迫力には人気がある。それほど2人の作家の技術の巧みさがあつた故であろうが、本授業でも、どちらを選ぼうと自身がしっかりと判断した結果であれば良いとした。要は自分の判定に自信と根拠を持つことである。

今回の一連の授業実践による子ども達の感想の中には「楽しかった」「おもしろかった」という感想も多かった。その文脈からみて、これは単なる感想の言葉ではなく、「審査の体験」の喜び、「大きな葛藤の中での決断」の喜びという、子ども達の心の表れがここにはあると推察する。

また、今回の授業実践でも子ども達は自身の意見を述べるとともに、それぞれの想いを確認し合っていた。本教材がコミュニケーションの場をつくり出し、その能力を高めるためにも有効であることは明らかであるが、その他にも感想からは、歴史的事実に基づいていること、優秀な二人のどちらを選んでもいいのではないかということ、さらに鑑賞を深めたいこと、自身の表現に生かしたいことなどが述べられている。そして、多くの子ども達が、審査の難しさを感じ、当時の審査員の労をねぎらっていた。評価する側の気持ちも十分に理解しているのである。

前回の「石庭をつくる！」の授業から確認された項目、「① 授業への意欲」「② 審美眼の育成」「③ 創造と工夫」「④ コミュニケーション能力」「⑤ 次の鑑賞への自主的発展」「⑥ 体験的真實味」は、ここでも十分に達成されたと考える。さらに、「⑦ 制作表現への発展と意欲」を加えることができると思う。

3 体験型鑑賞授業「あなたも審査員！-表現にもいろいろな道がある-」

以前から、「絵がうまく描けるようになりたい」「立体をうまく作りたい」という子ども達の願いを、どのようにしたら叶えることができるだろうかと考え、いろいろな試行を続けてきた。この思いは、美術教師の誰もが思う願いであり目的であると考える。

思案した挙げ句、表現活動としては一点透視図法の易しい描画法の開発⁽²¹⁾や、例えば写生大会においては実際の場所選びのコツや構図の考え方そして着色の技法などを指導して、その効果を試みたこともある。

そのような折、平成10年の学習指導要領の内容変更に伴い、小中学校の評価がこれまでの相対評価から絶対評価へと移行した。これまでの「5:7%、4:24%、3:38%、2:24%、1:7%」の比率による評価が崩壊したのである。教師は対応に苦慮したが、評価項目を定めABCの3段階で判断し、総合した結果をもとに評価を下すこととなったのである。同時に、美術における評価の観点も「関心欲態度」「創造的な技能」「構想や発想の能力」「鑑賞の能力」へと変更された。

これはある意味一つの良いきっかけとなった。「関心欲態度」が項目の最初に置かれて強化されたのである。もちろん美術教師である以上、子ども達に対して美術の技能を育成するのが最も重要なこととは思いつつも、「関心欲態度」の面からも子ども達を育てて行く道筋が明確にされたのである。このことは、生きていくことの中で、少々の困難にも打ち勝っていく子ども達を育成することにも繋がり、課題に最後まで取り組む力が重要視されて、美術表現力の得意不得意を越えたところにも光が当てられることになったのである。

本授業は、そのような評価に関することを扱った体験型鑑賞教育としての一教材である。今回の「具体的主体人物」は、子ども達の絵画作品を評価する「美術教師」である。子ども達は美術教師に成りきって生徒作品を評価することになる。相対評価と絶対評価の違いも理解しながら、いつもは評価される立場の子ども達が、評価する側の立場になって、作品というものを改めて見つめ直すのである。

さて、鑑賞授業「あなたも審査員」は、平成14年に筆者が熊本大学教育学部附属中学校勤務時代に開発し、実践発表した授業⁽²²⁾（以下、緒方授業）である。今回新しく平成29年に、阿蘇市立一の宮中学校において上村萌子教諭に本題材による授業実践協力⁽²³⁾（以下、上村授業）をお願いした。

1) 授業の基本的構想（緒方授業）

(1) 題材名

「あなたも審査員！ー表現にもいろんな道があるー」
鑑賞（1時間取り扱い）

(2) 題材について

本題材は、教師に成りきって写生大会の作品を例に評価を行う体験型鑑賞である。評価を前面に扱えば、作品は価値的に貧しいものになるおそれがある。しかし、作品例を具体的に評価することにより、子ども達が表現方法や技法などに着目し、表現における多様性を理解し自分なりの表現を行えば、自らの作品もより価値あるものになっていくと考える。はっきりした目的意識は、意欲につながり、表現も向上するのではないかと仮定する。自分にあった描き方を考えさえ、いかなる表現方法でも、絵画としての価値を持ったりつばな作品になり得ることを確認させるための表現と鑑賞の融合した教材でもある。

(3) 指導内容について

時間数の削減により、大きな絵画制作は写生大会に限られるような現状があった。最近では写生大会の実施も難しい学校は少なくない。対象をじっくりと見つけ、大きな画面に形や色を置いて行く表現活動は実に厳しい状況である。ここでは写生大会の作品をもとに授業を進めて行くが、その実施の有無に関係なく、「作品の評価」という視点のもと授業を展開する。

描くことの楽しさは、その技法や表現方法、絵の価値観を理解すればより味わうことができるものであろう。美術の基礎・基本を「絵が描けること」とし、ここでは、まず、表現の多様性を知らせ、基本的な技法や制作の計画例を具

体的に示すことにより、制作への取り組み方を考えさせていく。評価項目も明示するが、例えば、形についての評価などが、単に写実的な形のとらえ方の善し悪しでなく、表現方法にあった捉え方としての評価であることを理解させる。作例としては、写実的なもの、デフォルメ的なもの、ダイナミックなもの、繊細なものを提示し、どのタイプでもそれぞれで頂点をめざすことができることを理解させ、「表現にもいろんな道がある」ことに気づかせる。そのような理解自体を意欲づけとして、最終的には表現活動に目標を持って、完成まで取り組んでいくという態度も身に付けさせたい。ある程度の美術表現を理解した時期に、絵画表現を改めて見つけ直させ、美術表現の多様性を知った上で、価値観や表現方法を確かなものにするにより、絵画表現ばかりでなく、これ以降のいろんな分野における表現や鑑賞においても、子ども達はより高次の美術的能力を身に付けていくものとする。

(4) 学習の展開

配時	生徒の学習活動と内容	教師の支援	<input type="checkbox"/> 基礎技能 <input type="checkbox"/> 基礎知識
導入 10'	1 表現方法の違う4作品について審査する	<ul style="list-style-type: none"> ○ 4種類の表現について考えさせる。 ・ 基盤は何が（構図、配色など） ・ すべて同等で価値ある作品であることを知らせる ・ どのような観点があるか考えさせる。 ・ 以下の展開につづく導入として扱う程度とする。 	<input type="checkbox"/> 作品の評価 <input type="checkbox"/> 表現方法の違い <input type="checkbox"/> 作品の価値
展開 A 20'	2 作品例をもとに評価を行う 3 評価結果を発表する	<ul style="list-style-type: none"> ○ 班ごとに1枚の作品を評価する。 ・ 6班で3例の内1枚を評価させる。 ・ 観点の例を示し、具体的に作品を評価させる。 ・ お互いの意見を大切に、自由に意見を出させる。 ○ 評価結果を発表させ、様々な意見を出し合わせる。 ・ 観点をもとに発表させる。 ・ 「こうしたらもっと良い作品になる」という建設的な発表。 ・ お互いの意見をもとに自分の考えを高めさせていく。 	<input type="checkbox"/> 評価項目の設定 <input type="checkbox"/> 形 <input type="checkbox"/> 構図 <input type="checkbox"/> 配色 <input type="checkbox"/> 構成 <input type="checkbox"/> 芸術性 <input type="checkbox"/> 意見発表
展開 B 15'	4 自分のこれからの取り組みについて考える 5 自分の表現のタイプを考える	<ul style="list-style-type: none"> ○ 作品例やお互いの意見をもとに、自分の制作への目標を考えさせる。 ・ これまで出た意見をもとに、自分の考えをまとめさせる。 ○ これまでの作品例の中から、自分にもっとも合っていると思う表現を選ばせる。 ・ 自分の願望や可能性の立場から ・ 作品例を提示し、これからの自分の取り組みを発表させる。（代表） 	<input type="checkbox"/> 目標設定 <input type="checkbox"/> 表現方法の選定
まとめ 5'	6 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の学習を確認し、写生大会への意欲を具体的に高める。 ・ 取り組みからのアプローチ ・ 表現方法や技法からのアプローチ 	<input type="checkbox"/> 目標設定

図 34 緒方授業 展開案

図 34 が実際の指導案における学習の展開案である。まとめると以下のとおりである。なお時間は変更している。

- ① 表現方法の違う4作品について審査する 10'
 - ・選んだ基準は何か(構図、配色など)
 - ・審査で、どのような観点があるか考えさせる
- ② 作品例をもとに評価を行う 10'
 - ・班ごとに3例の内の1枚の作品を評価する
 - ・観点の例を示し、具体的に評価させる
- ③ 評価結果を発表する 10'
 - ・観点をもとに発表する
 - ・こうしたら良いという建設的な意見も交える
 - ・他の人の意見をもとに自分の考えを高めていく
- ④ 自分のこれからの取り組みについて考える 5'
 - ・お互いの意見を参考に自分の目標を考える
- ⑤ 自分の表現のタイプを考える 7'
 - ・作品例の中から自分に合う表現を選ぶ
 - ・自分の力量も考慮する
 - ・作品例を提示し、これからの取り組みを発表する
- ⑥ まとめ 8'
 - ・トリミングによる構図の変化
 - ・取り組みの意欲からのアプローチ
 - ・表現方法や技法からのアプローチ

(5) 付属する資料等について

- ① 「学習の展開 ①」で使用する5作品
これらは全て生徒作品であり、外部のコンクールで特選などの評価を受けた優秀な作品である。



図 35 生徒作品 1



図 36 生徒作品 2



図 37 生徒作品 3



図 38 生徒作品 4



図 39 生徒作品 5



図 41 英語科教師作品

② 「学習の展開 ②」で使用する 3 作品

配色は美しいが、画面の大方を石垣が占めていて構図にやや問題がある図 40 の生徒作品。なお、現場は熊本地震により現在修復中である。

この頃の熊本大学教育学部附属中学校では新任の教師は、写生大会で絵を描かなければならなかった。他教科の英語科教師が赴任した年の写生大会のうちに描いた作品である図 41。どうやらこの教師は、絵が不得意ということはなさそうである。

そして、構成物が多く構図は悪くはないが着色が途中段階のように見える図 42 の作品。

これら 3 枚の作品を班が分担して評価する。全部で 6 班の場合は、1 作品について 2 班ずつがそれぞれの絵を評価することとする。



図 42 生徒作品 7

③ 板書

板書における対象作品などは図 43 のように配置した。最終的には評価表やトリミング例の作品も提示する。



図 40 生徒作品 6

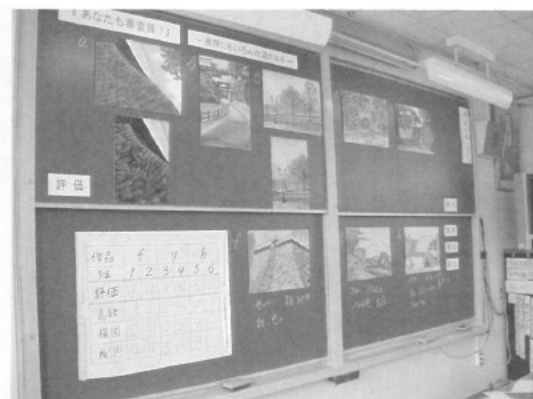


図 43 板書


④ 学習シート

学習シートは美的にできるだけ簡潔にして記録に時間を要しないように心がけた。まずは5作品の中からグランプリ1枚を決めさせ、3作品の中から1枚を観点別に評価して、これまでの自身の取り組みについて記入させた。


『あなたも審査員!』～表現にもいるんな達が～ 学習シート

2年 姓 氏名 _____


▼1 審査しよう! グランプリはどれに? 自分で選んだ作品に○を



・選定は
決定記号




・決定理由





・どんな観点(評価項目)が?

▼2 評価します! (3点の中から1点を2度で) 審査する作品に○を



・評価説明





※ 評価結果		
項目	自分は	誰は
評価		
観点1		
観点2		
観点3		

・良いところ _____

・改善点 _____

▼3 今日の学習をおとしての感想
これまでの自分の取り組みは、どうだったでしょう?

こんどの写生大会、あなたの選ぶ観は?

① 意欲をもって 誠実に

② 写真のように

③ 印象派画家のように

④ ダイナミックに

⑤ その他 _____

図 44 学習シート

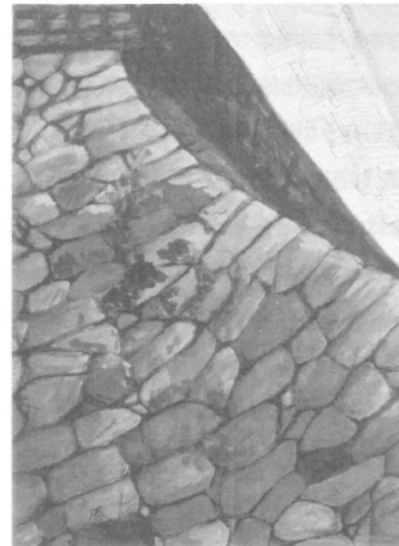


図 45 図 35 をトリミング



図 46 図 37 をトリミング

⑤ トリミングによる構図の変化

図 45 は、図 35 をトリミングして縦置きとし、上方への石垣の上昇感と石組みの配置を強調する作品となっている。また、図 46 は図 37 のトリミングでこれも縦置きの構図とした。広がりから奥行きに注目した作品となっている。なおここでは、トリミングによる構図の変化を大きく扱うことはせずに、授業最終の「展開⑥」で構図を考える場合の参考的な資料として扱う程度とする。

2) 上村授業

授業は緒方授業をもとに組み立てられている。図 47 が上村授業の展開案である。まとめると以下のように表記できる。

- ① 本時の目標を確認する
- ・ 本時の活動内容を知る

3'

- ② 表現の違う5作品について審査する 7'
 - ・5作の中からグランプリを決定する
 - ・どのような観点があるか
 - ・班で話し合う
- ③ 作品例をもとに評価する 15'
 - ・班ごとに1枚を審査
 - ・それぞれの観点ごとに5段階で評価
 - ・作品の良い点や改善点を根拠を持って
- ④ 評価結果を発表する 10'
 - ・評価結果とその理由
- ⑤ 今後の取り組みについて考える 10'
 - ・風景画の良さを理解できた
 - ・構図や配色、描き方などこだわりを持って
 - ・写生大会への意欲
- ⑥ まとめ 5'
 - ・本時の学習の振り返り
 - ・本時の自己評価
 - ・写生大会への意気込み

なお上村授業では、学習シートを以下のように考案していた。

3年美術鑑賞
あなたも審査員～表現にもいろんな道がある～
2年 組 号 氏名

目標：作品を評価して、自分が描く風景画の完成イメージを持つよう

1 審査しよう！グランプリはどれ？

A B C D E

()に決定！
理由： → 班で()に決定！
理由：

2 作品の評価をしてみよう！
※評価結果(5・4・3・2・1)

F G H

()	自分	班	評価理由	良いところ	改善点
総合					

3 写生大会、どんな作品にしたいですか？

自己評価
○風景画の評価を、しっかり理由付けして行うことができた。(5・4・3・2・1)
○自分が描く風景画の完成イメージを具体的に持つことができた。(5・4・3・2・1)

図 48 上村学習シート

上村授業での学習シートは緒方授業のものとはさほど変わらないが自己評価欄が設けてあり、写生大会へ向かう姿勢を一段と明確にさせようとしている。

さて展開において、作品5点の中からグランプリを選出する行為は、美術作品などではよくみられるコンクールの形式であり、旧態依然とした相対評価的な決定方法である。上村授業で子ども達に人気があったのは、「図36 生徒作品2」と「図37 生徒作品3」で、それぞれ28人中13票と12票を獲得し、この2点で票を分け他の作品は数票を獲得するに留まった。奥行きがしっかりと描かれたり、細部まで誠意を込めて描かれたりした作品が子ども達に好感を得たのであろうが、ここでは選出の志向やその結果が目的ではない。数点の作品に対して自分なりに決定した価値基準により順位を出すことが、以前の全ての教科における評

段階	学習活動【学習形態】	主な説明・指示	指導上の留意点	備考
導入 10分	1 本時の目標を確認する。 【一人】 作品を評価して、自分が描く風景画の完成イメージを持つよう	T この本時の目標を確認しよう。 T 作品を評価して、自分が描く風景画の完成イメージを持つよう	・本時の学習内容について見直しを持たせる。 ・全ての児童が評価できる作品であることを知らせる。 ・選んだ基準は何か(構図、配色など)	
展開 15分	2 表現方法の違う5作品について審査する。 【個人】 【YUIトーク(班)】	T 5作品の中からグランプリを決めてみよう。 T 班で話し合って決めてください。 T どのような観点がありましたか。 T 構図、配色、意欲など	・全て同等で評価のある作品であることを知らせる。 ・選んだ基準は何か(構図、配色など) ・どのような観点があるか考えさせる。 ・以下の基準に続く導入として取り進めさせる。	作品例 5枚 ワークシート
10分	3 作品例をもとに評価を行う。 【個人】 【YUIトーク(班)】	T 班ごとに、1枚の作品を評価しよう。 T それぞれの観点に関して5段階で評価をし、理由もはっきりさせよう。作品の良い点や改善点も出し合おう。	・観点を確認し、具体的に作品を評価させる。 ・お互いの意見を聞き合いながら「褒め合う」YUIトークを行うよう促す。	作品例 3作品 評価表
10分	4 評価結果を発表する。 【一人】	T 評価結果とその理由を発表してください。	・観点をもとに、わかりやすく説明させる。 ・「こうしたらもっと良い作品になる」という建設的な意見を言えるようにする。	
10分	5 今後の取り組みについて考える 【個人】	T 作品を評価してみて、風景画の良さが具体的に分かりました。写生大会ではどんな作品を描いてみたいですか。自分の考えを書きましょう。 評価：自己評価をもとに、写生大会へ向けての取り組み方を考えている。 自己評価の観点を理解し、自分の考えを持っている。 班員に選んでいない生徒へは、机周りでアドバイスを行いながら個別に指導する。	・構図や配色、描き方など、どのようなことにかけて描きたいか、具体的に自分の考えをまとめさせる。 ・本時の学習内容をまとめ、写生大会への意欲を具体的に高める。	
まとめ 5分	6 やったことの振り返り	T 今日は作品の評価を通して、風景画を描くときの大切な要素を学ぶことができました。目標に対して自分の頑張りを評価しましょう。 T 写生大会では今日の学びを生かして良い作品を描いていきましょう。	・本時の学習内容を確認し、目標に対する自己評価をまとめさせる。	

図 47 上村授業の展開案

価方法であったことを知らせることが目的である。

また、図 40 から図 42 までの 3 点を観点別に評価した結果は平均的には図 49 の表のような得点であった。子ども達はそれぞれに 5 段階で得点を付けていった。それぞれの観点「意欲」「配色」「構図」の面から捉えると、図 40 生徒作品 6 は、ほとんど石垣という構図にやや問題ありと感じた生徒が少なからずいたが、意欲的に最後まで仕上げている態度に感心して、図 49 の表のような得点となった。

図 41 英語科教師作品は、画面すべてに誠意のみられる表現で好感を得ていた。意欲、配色、構図と申し分ない評価となった。子ども達も、努力の跡が見られる作品は大切にするという姿が見られた。図 42 生徒作品 7 は意欲の面で低い点数となった。完成に至らずに提出してしまったということを子ども達はイメージしたようである。「もっと最後まで描いてほしかった」という表記も見られた。結果は図 40 と図 41 の作品が拮抗し、図 42 の作品が水を開けられた感じである。

	生徒作品 6	教師作品	生徒作品 7
総合	4	4	3
意欲	4	5	2
配色	4	4	3
構図	3	4	4

図 49 評価結果

3) 授業「あなたも審査員」における考察

生徒たちは、真摯に評価に向かっていった。これまでは評価される側であったのが、今回のように実際の美術作品を見て評価を下すという行為には子ども達の責任感も窺えた。「美術教師に成りきって」という条件を与えた時点で、時に鑑賞の授業で見られる茶化した意見はここにはなかった。責任持って評価するという誠実な姿が見られた。

各作品に対する図 49 の評価結果は妥当であると思われる。確かに図 40 生徒作品 6 は着色に工夫が見られ、最後まで取り組む跡が感じられる作品である。独特な構図とも言えるが、もう少し視点を変えた上で構図を決定していれば、もっと素晴らしい作品になり得たであらう。

ば、もっと素晴らしい作品になり得たであらう。

図 41 英語教師の作品は忙しい教師業務の中に最後まで制作に取り組んだ様子が感じられる作品である。しかし、よく見ると、手前の花壇は写實的に描かれ(図 50)、奥のホテルなどの形の表現や着色方法においては、概念的な表現(図 51)へと変わっている。子ども達にも授業展開最終の「教師のまとめ」の中で話したが、概念的な表現の部分は自宅で空想的に仕上げたといつと考えるのが妥当のようである。もし、写生大会の時間内で終了できなかったとしても、再度現場に行つて描いたらば、より素晴らしい作品になったと考えられることを伝えた。

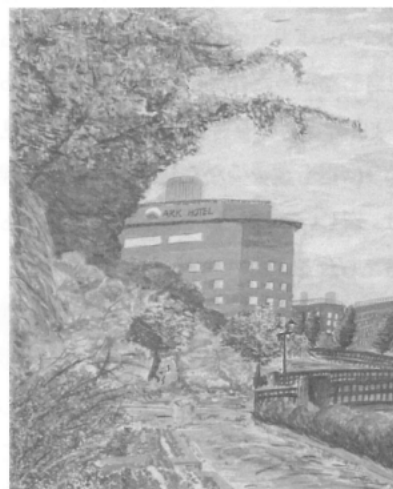


図 50 英語科教師作品 部分 a



図 51 英語教師作品 部分 b

図 42 生徒作品 7 はやはり最終までは意欲を持って放棄

した予想を子ども達も感じ取っていたようである。しかし、いろんな建物による構成がたくさん含まれており、形としては申し分ないという意見も出ていた。この作者がもし最後まで誠意を持って取り組んで着色に励んでいたら、素晴らしい作品になることは間違いないと感じていたようである。また、そのことがこれまでの自身の取り組みを反省したり、意欲的に表現に迎えばそれなりの良い効果が期待できたりするのではという積極性にも繋がると思われる。

さて、この授業では新しい取り組みを仕組んでみた。それは、3点の作品を評価する段階での方法である。これまでであれば、3点全てを班で評価するところであるが、1点ずつを担当して検討会を進めさせた。1つの作品を2班が担当することにより、他者の意見が班としても伺うことができ、担当しなかった作品についても気を配っている様子が窺え、「自分ならこう評価する」という意見も出された。このように担当数を少なくしても全体が把握されるということは、新しい手法として時間短縮の面からも効果的であると考えられる。

また、生徒作品1と3については、まとめの教師の話の中で、トリミングしたものを紹介した。図35と図45そして図37と図46の違いには、同じ絵から全く新しいものが生まれたかのように子ども達は感動していた。この体験型鑑賞教育の授業は、スケッチ大会などの表現活動へも結びつくものであるが、子ども達にとっては、新しい見方、新しい表現方法にも気づくことができる良い機会となったようである。

今回の授業実践でも子ども達の真摯に授業に向かう姿が見られた。自身の意見を述べながら班員の声も聞き、自分の主張をより確かなものにしていく姿が感じられ、そこには本教材がコミュニケーションの場をつくり出し、その能力を高めるためにも有効であることが確認できた。これまでの授業から確認された項目、「① 授業への意欲、② 審美眼の育成、③ 創造と工夫、④ コミュニケーション能力、⑤ 次の鑑賞への自主的発展、⑥ 体験的真實味」、そして「ブルネレスキとギベルティ」で加えた、「⑦ 制作表現への発展と意欲」は、ここでも十分に達成されたと考える。以上の7項目の効用は明確なものと判断する。



図19 誠意ある検討会

Ⅲ 考察

体験型鑑賞は、対象の人物に成りきることで授業を進めていく。成りきることは他者理解のことでもある。「ブルネレスキとギベルティ」では「審査する人の苦労が分かった」とか「あなたも審査員」では「評価することの大切さが分かった」など労いの言葉が聞かれた。周りの人の立場を理解することも本研究から生み出される項目として取り上げることができると思われる。ここに、「⑧ 人間関係のより良い構築」という項目として新しく付加したい。



図53 良好な人間関係

すべては「対象人物に成りきる」ことがいろいろなことを可能にしているのかも知れない。おどけたり茶化したりすることのない良好な教室の雰囲気構築されていく。授

業での望まれる姿がここにはある。「体験型鑑賞教育」によって身に付く能力は、順を改めて最終的には以下の8項目になると考える。

- ① 授業への意欲
- ② 体験的真實味
- ③ 審美眼の育成
- ④ 創造と工夫
- ⑤ 制作表現への発展と意欲
- ⑥ 次の鑑賞への自主的発展
- ⑦ コミュニケーション能力の向上
- ⑧ 人間関係のより良い構築

「あなたも審査員」で研究協力者として授業を実践した上村萌子教諭は大学時代にも本授業を行なっている。展開は緒方授業の指導案をもとに行なったが、本授業は教育実習生でも十分可能であることが実証されていることになる。これまで研究を進めてきた体験型鑑賞授業の「石庭をつくる！」でも、研究協力者であった吉田香寿美教諭は大学生時代の教育実習のうちに授業を行い、「ルネサンスのライバル1 -ブルネレスキとギベルティ-」に関して、現在大学院2年生の学生が学部4年次に一般協力校での教育実習で実際に授業を行っている。

すなわち、本研究における各授業は誰にでも実施可能ということである。

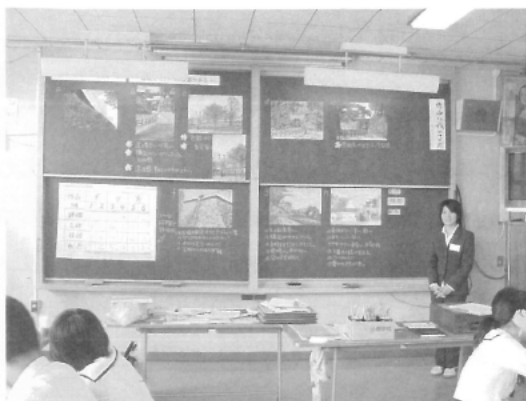


図 54 学生時代の上村実習授業

おわりに

美術の鑑賞をするときに、よくテーマとか作家の人間性などについて言及するが、音楽でいえばやはりメロディやリズムそして美術でいう素材感としての音色等のようなものが挙げられるであろうか、何か心をつつ要素が美術作品にもあるように思う。音楽においても、まずは素晴らしい旋律や音色が大切であろう。

同じように、美術においても感動のきっかけは、匠の成せる技なのかもしれない。本研究の内容は、体験的真實味をもって子ども達の心を揺さぶっていく。「子ども達は真實を求めている」のである。これからも教師の理想とする授業、子ども達が望む学習の真實性を追究し、さらなる研究に精進して行きたい。

そしてもう一つの思いは、「絵が描けたらいいな」「美術が分かったらいいな」という子ども達の願いを少しでも叶えてあげることである。

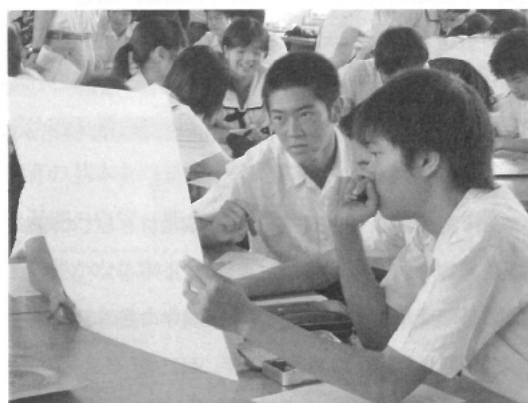


図 55 真實を求めて…真剣な表情の子ども達

なお、本研究の体験型鑑賞教育は、その内容を美術の鑑賞の全授業時間を使って展開することを目的とはしていない。体験型鑑賞の授業は、いろいろな方法がある美術鑑賞授業の中の一つとして取り上げられれば良いと考える。

いろいろな教師の考えるいろいろな鑑賞授業の中に、体験的真實味を通して表現への発展性も含む本研究の鑑賞授業を取り入れたり、これらの題材例をもとに新しく教材を開発したりしていく教師の強い意欲を期待している。

註

- 1 熊本大学教育学部附属中学校平成 15 年度授業実践研究会で発表した研究授業（題材名「和風庭園をつくる！」）。平成 15 年 9 月 20 日（土）に 2 年 1 組の生徒とともに授業実践発表した。
- 2 熊本大学教育学部附属中学校教諭，美術科教師。附属中学校は各学年 4 クラスで一クラスはおよそ 40 名。
- 3 平成 28 年度まで熊本県南関町立南関中学校教諭，美術科教師。南関中学校は各学年 3 クラスで一クラスはおよそ 25 名。
- 4 寸法については龍安寺のパンフレットにある「東西 25 メートル、南北 10 メートル」を参照した。
- 5 熊本県玉名郡玉東町木葉に在する木葉山の麓の石と熊本礦業株式会社が加工した砂を使用した。
- 6 フィリッポ・ブルネレスキ (Filippo Brunelleschi ; 1377-1446) イタリアの建築家、彫刻家。フィレンツェ大聖堂の大円蓋を建築した。当時 24 歳。
- 7 ロレンツォ・ギベルティ (Lorenzo Ghiberti ; 1378 頃-1455) イタリアの金工家、建築家、彫刻家。当時 23 歳頃。
- 8 附属中学校美術科教諭時代の 2004 年に開発、実践。
- 9 「一日若駒大学」は、大学教授による出張講義。1、2 年生を対象に、学問に対する興味関心を喚起し学習や進路への意欲高揚を目的とする。18 講座の中から選択で本講座は 24 名が受講した。
- 10 本紙 p76 掲載論文、関根浩子氏の「鑑賞教材としての浮彫の可能性と鑑賞ポイント」も参考にされたい。
- 11 吉川登「「行為としての鑑賞」再考-鑑賞学の基礎理論の再検討-」『美術教育学』第 32 号、2011 年、441-452 頁。
- 12 当時大学 4 年生の美術科学生岩間美咲希が考案。実習校熊本立桜木中学校は各学年 4 クラスで 1 クラスはおよそ 30 名。
- 13 ジョルジョ・ヴァザーリ (Giorgio Vasari ; 1511-1574) イタリアの画家、建築家、文筆家。著書『画家・彫刻家・建築家列伝』は、イタリアルネサンス研究の重要資料となっている。
- 14 ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家建築家列伝』森田義之 (訳)、白水社、2009、453 頁。
- 15 ドナテッロ (Donatello ; 1382-1466) イタリアの彫刻家、ブルネレスキとも交友が深い。
- 16 『世界彫刻全集 8 ルネッサン』160 頁。
- 17 佐々木英也 (監)『NHK フィレンツェ・ルネサンス 2 美と人間

の革新』日本放送出版協会、1991 年、11、35 頁。

- 18 吉川逸治他『新潮世界美術辞典』新潮社、1985 年。
- 19 『NHK フィレンツェ・ルネサンス 2 美と人間の革新』10 頁。
- 20 大きさについては『NHK フィレンツェ・ルネサンス 2 美と人間の革新』7、8 頁を参照した。なお、二つのレリーフの寸法については、文献によりまちまちで異なって表記されている。
- 21 緒方信行「美術科における立体把握のための実践研究 ～『簡易透視図描画法』による立体および空間の把握～」『熊本大学教育実践研究』31 号、2014 年、25-32 頁。
- 22 熊本大学教育学部附属中学校、平成 14 年度研究発表会にて 2 年生の授業として発表。
- 23 熊本県阿蘇市立一の宮中学校教諭，美術科教師。一の宮中学校は各学年 3 クラスで 1 クラスはおよそ 25 名。

付記

本稿は、筆者の論文「体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業「石庭をつくる」をもとに-」(2015) および「体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業教具「石庭授業セット」について-」(2016)、「体験型鑑賞教育の研究 -ブルネレスキ作とギベルティ作のレリーフの教材としての価値-」(2018)、「体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業「ルネサンスのライバル I ブルネレスキとギベルティ」をもとに-」(2018)、「体験型鑑賞教育の研究 -鑑賞授業「あなたも審査員 -表現にもいろんな道がある！-」をもとに-」(2018) を一部修正しながら新たに一つの論文としてまとめたものである。

なお、本稿は平成 27 年度科学研究費基盤研究 (C)「体験型鑑賞教育プログラムの開発と実践・評価」(課題番号 15K04451、研究代表者：緒方信行) としての研究成果の一部である。

謝辞

平成 27 年度から 29 年度の研究協力者として実践授業をしていただいた村田崇教諭、吉田香寿美教諭、上村萌子教諭、そして授業実践の場を与えていただいた熊本大学教育学部附属中学校、南関町立南関中学校、阿蘇市立一の宮中学校の多大なるご支援とご協力のご高配には、ここに深く感謝申し上げます。

(おがた のぶゆき)